

# 第11回「文芸思潮」エッセイ賞発表

第11回  
文芸思潮  
エッセイ賞

二〇一四年度第11回「文芸思潮」エッセイ賞には、今年も四八一篇という多数の御応募をいただき、まことにありがとうございました。今回も若年層から九十歳代の老年層まで幅広い世代から寄せられたばかりでなく、アメリカやアジア、ヨーロッパなど世界中から広く御応募をいただきました。また貴重な体験だけでなく、重要な記録や、社会に対する鋭い批評も多く寄せられ、現代に生きる人々の様々な姿が反映された充実したコンテストとなりました。

例年の通り、まず選考委員会予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によって討議されました（福岡哲司選考委員は七月二十一日逝去されました）。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には当選作および優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞なども、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただきます。御期待ください。

また、今回こちらの不手際で、一次予選、二次予選など予選選考に訂正漏れがあり、まことに御迷惑をおかけしました。深くお詫び申し上げ、訂正させていただきます。

## 「文芸思潮」エッセイ賞

### 最優秀賞

「時空を超えて」

山田真弓（東京都新宿区）

### 社会批評賞

「老いの方舟」

初衣 文（高知県南国市）

### 優秀賞

「斑猫」

西田信博（茨城県つくば市）

「流れの先に」

本間淑子（東京都江東区）

「鶏小屋」

八束一臣（鳥取県境港市）

「麓の街」

小野友貴枝（神奈川県秦野市）

「ボイラー・メーカー」

本間一孝（神奈川県川崎市）

「骨を播く」

山崎人功（長野県安曇野市）

### 奨励賞

「ロシア記事」

志水通男（兵庫県神戸市）

「1971年中国 夏」

野上卓（東京都世田谷区）

「京都 東福寺 雪景色」

九条之子（東京都昭島市）

「緩く穏やかな流れ」

向井初子（神奈川県横浜市）

「母の思い」

近藤幹夫（福井県勝山市）

「東ベルリン・トイレ物語」

西本美彦（滋賀県大津市）

「言問橋から……丹野と二人で」

印南房吉（神奈川県横浜市）

「虹」

和田 瞳（福岡県福岡市）

「バッハの弾き方」

山中弾人（神奈川県鎌倉市）

「珈琲を巡る思い」

佐々木今日子（東京都東大和市）

「叫び」

池山弘徳（宮崎県都城市）

「ぎつちよ」

森 幸夫（福岡県福岡市）

「春の日のつれづれに」

榎葉 雍（オランダ）

「赤い緒の下駄」

南雲佐和（神奈川県茅ヶ崎市）

「ママはオンナ」

武藤蓑子（東京都多摩市）

「夜学生という生き方」

鈴木あぐり（栃木県小山市）

「五郎太」

白木 巍（愛知県知多郡）

「ねんねこの雪」

八木春夫（長野県南佐久郡）

「うしろ姿」

井上理博（神奈川県横浜市）

「癌破リズム」

家森澄子（岡山県倉敷市）

「忘れられない人」

高橋惟文（山形県山形市）

「ああ、六四年間」

中村行寿（岩手県滝沢市）

「津波が奪った歴史的記録」

安芸 遙（神奈川県横浜市）

「給水管の春」

西島雅博（福島県いわき市）

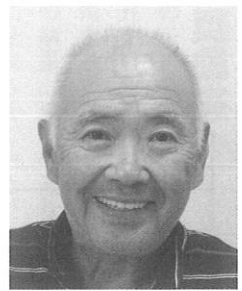
「褒めてあげなくてごめんね」

辰巳 義（大阪府大阪市）

林 直子（京都府城陽市）

- 「山は今」 井上美恵 (三重県名張市)
- 「秩序ある行動」 寿 紫乃 (埼玉県川越市)
- 「ネットサーフィン」 友輝誠司 (愛知県名古屋)
- 「ロシアのチョコレート」 板東洋三郎 (神奈川県横浜市)

## 選評



みずき りょう

1942 北朝鮮生まれ  
99 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞  
2006 小説「お見合いツアー」で第49回農文学賞受賞

## 新しいエッセイとの出会いの楽しさ

### 水木 亮

毎年猛暑の中で、激論沸騰するエッセイの最終選考会だが、今年はすんなりと山田真弓さんの「時空を越えて」が

最優秀賞に決まった。  
私も最終に残った作品すべてに目を通して、「時空を越えて」が一番だと思った。ここには医者目線から見た、独自の世界が書かれていて興味深い。特に死者と医者との関わりが、実際にそういうことがあるのだと思知らされ面白かった。エッセイの領域がまたあらたに広がる思いで期待される。

以下優秀賞の作品について触れたい。

最優秀賞の「時空を越えて」の次に注目したのは、山崎人功さんの「骨を播く」である。亡くなった母親の日記帳から、死んだら自分の骨を粉にして、屋敷畑と花園に播いてもらいたいとあり、それを実践する詳細が書かれている。骨壺を開き、その様子が丁寧に書かれていて、母親の骨が美しくまるで化粧していたように見えたところが悲しい。残りのいとしい母の骨粉を、自分の身体に降りかける最後のシーンは、作者の年齢と重ねて、あたりに母親の微笑が浮かび上がるようである。

本間淑子さんの「流れの先に」はウォーキングで移動しながら、自分の過去の出来事を回想してゆく文章の構成が新鮮である。別れて二年もせずに急逝した夫、その夫とのいろいろな確執などエピソードが読ませる。タイトルのように、厳しい人生だが、いつかその先に、きっと癒やされるものがあることを信じたい。

ンは感動的であった。

佳作に入賞した大田綾子さんの「万年筆」は、物に託したエッセイでそのこだわりが面白い。特に万年筆へのうんちくがよい。これで人を感動させたら素晴らしいのである。他の審査員の評価はあまり高くなかったが、私はこの人は磨いていけば光るものがある人だと思う。今後も勉強して欲しい。

その他よかったと思うエッセイをあげておく。金京姫「オモニの故郷」、和泉真弓「見えない音」、大下弘文「李香蘭」、出塩友美子「普通とは何か」、井上理博「ねんねこの雪」、喜島蘭「ひなちゃんのおにぎり」、初衣文「老いの方舟」、山中弾人「パッハの弾き方」、渡辺寿美子「利用者Cさんとの関わりの中で」などであった。また来年も頑張ってください。

エッセイコンクールも十一回目を迎えた。ここから二〇回をめざして新しい出発でもある。

この秋には過去最優秀賞に選ばれた作品の小朗読会を甲府市で計画している。そういう会を通じて、最優秀賞の作品ばかりでなく、これからいろいろ作品が、朗読を通じて人びとに広まることを楽しみにしている。

## エッセイ賞 選評

西田信博さんの「斑猫」は満州の原野で「斑猫に救われた父親の思いを書いた。「ハンミョウ」という生き物に託した表現がうまい。それだけに、どうでもよいことかもしれないが、ペンネームも文章のうちであると私は感じた。優秀賞の「麓の街」を書いた小野友貴枝さんは、研鑽の甲斐あって文章がひきしまり上達している。戦後の厳しい時代の墮胎の現実をしっかりと書いた。

以下、奨励賞で心に残った作品を挙げてみたい。  
向井初子さんの「緩く穏やかな流れ」は人の魂は、ある限られた数のグルーブを組み、出会いと別れを繰り返して、その数は六〇人で六〇年という。実際自分の経験を書いていて興味深い。

高橋惟文さんの「痛破リズム」は、飾らずストレートに自分の痛の体験を書いた。同年齢の私としても切実である。このエッセイがガンと闘う同じ仲間と元気を与え、励ますことが出来たら嬉しいことである。  
外山寛子さんの「忘れ得ぬ味」は子供の時の、朝鮮からの辛い引き揚げの飢餓のなかで、いただいたご飯を一緒に食べて吐いた記憶が書かれている。戦争で特に悲惨なのは子供である。にもかかわらず、戦後七〇年で再び、戦争が出来る国になろうとしている日本はおろかである。

八木春夫さんの「五郎田」は少年の目で人間と馬との関わりを書いた。特に病気となった馬をみんなで助けるシ-

- 「三十五年振りの再会」 牧 康子
- 「頼光の旧蹟」 川西葉吉
- 「ヒマラヤからのラブレター」 市原きみ子
- 「お砂糖はいくつ?」 七夜月尚
- 「石の人」 寒川靖子
- 「道すがら」 遠藤芳子
- 「忘れ得ぬ味」 外山寛子
- 「対岸の光景」 長谷川智美
- 「不安の始まるとき」 小城ゆり子
- 「幸せは石けんの香り」 川口かおり
- 「釣り女」 水口清治
- 「遙かなる故郷」 山県大慈
- 「橋」 早川 雪
- 「雪」 瀧沢 鈴
- 「娘への手紙」 宮本 肇
- 「祖父のマント」 森千恵子
- 「母親という仕事」 田中真子
- 「再会」 高井理笑子
- 「いつか逝く人」 稲垣恵利子
- 「十五歳の私へ」 もりかわしほ
- 「ラクダ色の革カバン」 塚原 渉
- 「父の手のひらの上で子狐になる」 やすみこうすけ

- 「おしまえな」 小川野菊
- 「オモニの故郷」 金 京姫
- 「尺取虫のトロッコ」 梶川洋一郎
- 「不器用でメランコリックな旅立ちの想い」 坂本那香子
- 「起笛」 立山 紘
- 「チームワークの舞台」 龍口 宏
- 「父の約束」 田中真紀子
- 「母の置き土産」 下村きよ子
- 「最期の手紙」 金田一淳
- 「息子への懺悔」 平沢裕子
- 「女の机」 三宅直子
- 「お花見」 飯島もとめ
- 「運というものの不思議」 松川信一
- 「ひなちゃんのおにぎり」 南川亜樹子
- 「普通とは何か」 出塩友美子
- 「母といっしょの『結婚サギ』」 山田まさ子
- 「私の出産」 原 民子
- 「万年筆」 大田綾子
- 「ヤクダツキ」 七尾有美
- 「夜桜能に寄せて」 内藤美柚
- 「サクラとスマイル」 竹澤一晃
- 「命日の誕生日」 後藤次郎
- 「李香蘭」 木下弘文



いがらし つとむ

### 新しい領域

1949 山梨県生まれ  
79 「流<sup>る</sup>滴<sup>た</sup>の島」で群像  
新人長編小説賞受賞  
98 「緑の手紙」で読売  
新聞・NTTプリンテック  
主催第1回インターネット  
文芸新人賞最優秀賞受賞  
2002 「鉄の光」で健友館  
文学賞受賞

### 五十嵐 勉

第十一回のエッセイ賞は、これまでとは違った趣きがあった。それは死と向かう合うことの中に異なった角度から生の姿を浮かび上がらせてくる作品が上位をしめていたことだ。

今回最優秀賞は、あっさり決まってしまった。ダントツの高得点で上がった山田真弓氏の「時空を超えて」がそのままなりいってしまった。いつもは侃々諤々<sup>かたかたがた</sup>の激しい討論になる選考会が、拍子抜けするくらいにあっけなかった。福岡哲司選考委員が逝去されて四人の選考会だったせいもあるだろうが、十一回を数える選考会で、このように異論なく早々に治まったのは初めてのことである。それだけこの作品には底からの力があつたということだろう。

- 「山岳遭難」 中川一之
- 「ノイロ君への感謝状」 遠遊
- 「ワープロ校長奮戦記」 岸野洋介
- 「可愛い子にはヨーロッパ一人旅」 吉田はるみ
- 「見えない音」 和泉真弓
- 「消えゆくもの」 篠田顕子
- 「利用者Cさんとの関わりの中で」 渡辺寿美子
- 「ロイヤルミルクティーを一つ」 長枝 舞
- 「赤と黒」 六藍光洋
- 「赤い手帖」 いまだまりこ
- 「真女の遺産」 田窪宣彦
- 「生きる力をくれたストリップ小母さんたち」 西海和也
- 「母の指輪」 石井恵子
- 「ユー・ハヴ・ノー・リーズン」 田中英夫
- 「あなたの残り香」 あねとあなた

### 社会批評佳作

- 「『三つ子の魂百まで』の重要性」 佐生綾子
- 「22分に一件のレイプ地獄」 李耶シヤンカール
- 「ヤクザ映画とフロイト」 御室 孝
- 「悪ふざけはいらぬ、もつと冗談を」 山世孝幸
- 「日本人の忘れ物」 岩谷隆司

「時空を超えて」は、筆者の、死者を見送らざるを得なかった医療経験から、その死の姿を捉えて、そこに新しい領域を発見していた。「亡くなると不思議なほどに、清らかに輝くような顔になる」「迷うことなく旅立つ姿になるのである」という部分や、死後「ふとその人の存在をすぐそばに感じるのである」という超現実の現象の叙述は、崇高な色を帯びて、届いてきた。死は忌避すべきものではなくて、別の領域へ旅立つ厳かな儀式のようにも映じてくる。静かなものがあとに残るエッセイで、医療を施す立場からこの領域に光を当てた筆は意義深いものがある。

社会批評賞の初衣文氏の「老いの方舟」は、これと対照的な、物的な処理としての老いと現在の社会の相を鋭く批判している。現代は老いというものを、醜いもの、不便なもの、現代生活の中から排除すべきものとして、ある覆いのなかに隠し、抹消していく、負の合理性を押し進めている。この作品はその実相の赤裸々な姿、介護保険制度の裏の姿をあらさまに見せることによって、その矛盾を的確に捉えている。真の老いの意味と価値を抹殺していこうとする方向に警鐘を鳴らし、それによって、では、命にとってどういう最期がいいのか、その真の姿を提示することに成功している。高齢化社会での重要な倫理を示しているところを評価した。

これに関連したテーマを感じたのは優秀賞の「麓の街」

離婚したその夫の死後に、川辺を歩きながら、自身の生きてきた道を振り返る筆運びだが、そこに流れる眼差しは痛切な美しさがあった、共感を誘うものだった。川の流れに沿って自身の生きてきた道を重ね、その意味を問う声は、天への問いかけとなって翔け昇っていく。胸を抉られた。同じテーマを扱った奨励賞の「珈琲を巡る思い」（佐々木今日子）も、さりげない珈琲を飲む行為のなかに夫との軋轢や苦悩がよくかき混ぜられていて、生の重みが匂っていた。

優秀賞では西田信博氏の「斑猫」が、ソ連に抑留された父親の運命の岐路を虫がよく象徴していて、戦争体験の酷さと凄惨さを描き出していた。斑猫のシーンは象徴的であり、前半改行が多くあまりに詩的な脚色が過ぎていて、リアリティを逆に損ねているのが惜しまれた。父親の朴訥さは、抑留体験のひどさを深めていいが、全体が小説的な作り上げを強めている点は、マイナスになっているように思う。

変わった題材は本間一孝氏の「ポイラー・メーカー」である。ポイラーマンたちが熱さのなから創り出したカクテルが、労働と結びついて深い味わいになっていることがこの作品の魅力を大きくしている。題材とその構築のしかたが的確で、好エッセイである。

八東一臣氏の「鶏小屋」は、失われた戦前の生活を書き

（小野友貴枝）である。これは看護師学校での苦学の体験の中に垣間見えた、妊娠中絶の人間の姿をテーマにしているが、社会の都合や避けられない事情によって夥しく殺されていく命への残酷さが、ここには鮮やかに留められていた。「中絶したあとのほうが妊娠しやすい」「また同じ繰り返し」「そのうち子宮内膜炎を起こし、正常な出産が出来なくなる」という言葉は、そのグロテスクな処理の中に命の側の深刻な叫びが響いてきて、胸の底を脅かされる。胎児たちの死が、一つの群れとなって社会の底へ沈んでいく姿を連想させる。この過程を経ての「公衆衛生看護」への道は、説得力がある。人生の軌跡を感じさせる作品にもなっていた。

死の意味を肯定的に扱っていたのは、「骨を播く」（山崎人功）で、母親の骨を庭や畑に播くその姿は、死者にとつても、残された者にとつても、どちらにも人間的なやりとりを感じられて、不思議な感動があった。ただ、選考委員の一部から、「農家にとつて大事な畑にそのような軽々しく散骨するものだろうか」という疑問が出され、その真偽に波紋が投じられたことは否定できない。散骨の美しさは脳裡に深く残る。

これらとは別に、今回印象に残った領域は、「離婚」である。その一つ、優秀賞の「流れの先に」（本間淑子）は、大学時代に駆け落ち結婚した夫との不運な人生が刻印され、留めようとする姿勢はここにも一貫していて、正確な筆致がその実現を大きく前進させている。常連ながらその筆力は冴えて、今はない農家の生活を温かく人間の匂いに満ちて再現させている。その姿勢も注目に値する作品である。

奨励賞のなかにも、「忘れられない人」（中村行寿）の解剖学教室の副手の存在、「ぎつちよ」（植葉雍）の鮮やかな自伝、「虹」（和田瞳）の女性自衛官の体験、「夜学生という生き方」（臼木巍）のF先生、「瓦工場の叫び」（池山弘徳）の頭の皮膚を剥ぎ取られた女性の叫びなど深く印象に残る作品がたくさんあった。特に、「春の日のつれづれに」（南雲佐和）の老人ホームでの愛娘の癌闘病への憂いは、胸を深く抉られたし、「癌破リズム」（高橋惟文）の闘病を越えての積極的な姿勢には心を打たれた。

エッセイ賞の何よりの充実感は、その一人一人の人生の重みに触られることである。その共感のうちに人生を問い直し、新たな意味を探る契機に満ちていることである。その意味でもこうした皆さんの優れたエッセイ作品に触れられることに深く感謝したい。



入選

- 「なんで僕が乳がんなんだ」 三木俊平
- 「着物の街」 小笠原幹夫
- 「蜘蛛の巣と博物館」 小川南美
- 「句会」 室生有紀
- 「まさかの世界」 奥田 登
- 「晴れる空」 田中浩司
- 「あの日のこと」 餅月まりな
- 「自称変な人」 藤城孝輔
- 「ハッピーバースデー」 つな
- 「母への思いと父のこと、そして妹へ」 内山 正
- 「じいちゃんのいる茶の間」 西永美沙子
- 「求める者」 大久保篤
- 「山の達人平地で転ぶ」 早月春美
- 「P」 相吉美沙
- 「懐旧」 三尾富子
- 「わたしのいちばんうれしい日」 きくちゃんマン
- 「艱難は汝を玉にしない」 佐藤清助
- 「たった一回限りの生、その後の死」
- 「消えた机」 佐藤義弘
- 「男の試練」 萩珠からん
- 「振り込め詐欺」 ゴルビー長田
- 「五十年の拘り」 持丸文雄
- 「最高の人生」 青柳みすず
- 林田緋紗子
- 「よい子」 金徳志津江
- 「父の背中」 小関真知子
- 「愛しいカモシカ」 滝野澤弘
- 「成都紀行」 西澤健一
- 「遺書 2015」 瀬川智美子
- 「お江戸のファストフード事情」 峰川修一
- 「私とまわりの人」 如月春世
- 「蒼いイタチとレッドキヤベツ」 池上 十五
- 「不器用行進曲」 日向ひるね
- 「冬を乗り切る」 前岡光明
- 「おもしろそうやん」 稲葉まさき
- 「母への電話」 西岡みどり
- 「母という怪物」 濱口明子
- 「父の死を前にして」 世波場葉
- 「朝をむかえに」 棚谷大地
- 「とびのフサ公」 北島一郎
- 「父の川柳」 瀬川真一
- 「耳を傾けて」 シコンノボタン
- 「きれいな線」 葵井慎子
- 「猫のはなし」 菅谷春子
- 「青いポスト」 宝菜ささら
- 「へらず口には我慢」 坂口保典
- 「怒りと憎しみの精神分裂病」 岩出孝一
- 「憂鬱への遺書」 今井 悠
- 「現実」 田辺叡玉
- 「映画『望郷の鐘』を見て」 山崎文男
- 「見えない絆」 宮本陽子
- 「船乗りの父の心は海のようにには広くない」 渡部優美
- 「眞贋」 紺野 慈
- 「水原の人・父」 福田 茂
- 「新鮮な現実」 吉田 興
- 「まほうにかけられて」 夏目愛子
- 「就活、敗者の言分」 堂満
- 「ぼーうず」 浦松隆志
- 「季節外れのメリークリスマス」 五味英司
- 「はまっちゃった」 岸本和子
- 「カンボジア修業という名の旅」 ナガッチョ
- 「日本人として」 沢はじめ
- 「バルセロナが教えてくれたこと」 ナツ

社会批評入選

- 「パラリンピックは全ての障害者の祭典に」 徳安利之
- 「井蛙の見」 内藤 誉
- 「これからの時代」 富嶋ヒロ
- 「日本語という芸術」 西守章憲



みかみ ひろし

作家  
1945 山梨県甲府市生まれ  
法政大学中退  
1982 「三日芝居」で  
すばる文学賞受賞  
著書 「三日芝居」  
「花供養」  
「月と五人の男」

一回きりの体験

三神 弘

最優秀賞の山田真弓「時空を超えて」は、「百人以上の人を見送ってきた経験」をもつ医者が、「死ぬのは一回きりの体験だ。その瞬間に何が起きているのか、どんな気持ちなのかわからない」と、問いかける。そういう医者自身はといえば「正直、わたしは死がおそろしい」と、打ち明ける。そして、「死ぬことはこわくありません」という患者の態度とも、向かい合うことになる。

病気はまた、患者一人一人の人生を照らし出す。「身寄りのない」患者もいれば、「家族が会いに来ない」患者もいれば、「アパートの一室で動けなくなっていたのを発見された」患者もいる。病院で、死という「一回きりの体験」をするのに臨んで、患者がどのような境地にいるのか

は、医者には、未知の領域になる。そして、読者を誘う。医者は死にゆく人たちの「顔を見守り、必要とされる手を差し伸べながらそこに居続ける」のだが、やがて、「亡くなると思議なほどに、清らかな輝くような顔」になることに心を打たれていく。そして「その人の存在をすぐそばに感じる」という体験をする。さらに「ああ、彼らがわたしを訪れてくれたのだと懐かしく思う」というほどの、親密さに達する。死にゆく人ともにあつてこそ、得られる言葉だ。

この作品では先進医療とか、技術といった概念から離れ、さらには、患者は病名からも解き放たれて、最期のときを迎えようとしている。病院のなかというよりも、精神のなかでの出来事であり、医療機器の音もなく、澄んだ耳に聞こえてくるのは、医者と、患者の息遣いだといつていい。その患者も、一人一人が風貌をもち、つまり、患者一人一人の存在をとおしてでなければ、人の「生と死」は語れない、というところに読者を導いていく。

優秀賞の諸作を紹介したい。

小野友貴枝「麓の街」は、「一生の仕事に就きたい」と看護学校へ進んだ女学生が、アルバイト先の病院で「人工妊娠中絶の悲惨さ」を知り、社会や、仕事の意義にめざめていく。「麓の街」とは「進駐軍の駐屯所、自衛隊の演習所のある」街で、女学生は病院のようすを、「中絶が終

わった女性は、これでホッとするのか、また働けると思うのかその心境は外から見たのでは分からない。たとえ、戦争のせいだということを知っても、戦後を生き抜くにはこれしかないのだと諦め、麻酔が覚めるまで布団のなかで過ごし、独りで帰って行く」と報告する。さらに、先輩看護師の「四、五か月経てば、また忘れたように来ますよ」という言葉も、聞き漏らさない。

本間淑子「流れの先に」で、団地の裏を流れる川に沿って、「行けるところまで歩いてみよう。落日の先を追ってみたい」と思い立つのは、老いを感じる一人暮らしの女であり、「焦燥」からだという。そして川沿いに歩いていけば、おのずとよみがえってくるのは、これまでの人生のあれこれで、「大学在学中の妊娠」、事業の「失敗でかさんだ負債」「借金」、夫の「女性問題」「離婚」「急逝」と、およそ平穏とはいえないことごとばかりだ。

しかし、こうしたなりゆきを「自分の固い殻を、呪わずにはいられない」と振り返るところに、ひとりの女性の自画像が浮かび上がる。時代小説を読んで「浮き沈みしながら生きた人々の姿が自分と重なり、そんな連なりのひとりなのだと思うことで、慰められることも多かった」も、心情を伝えている。川沿いを歩き、「はるかな海」に思いを馳せ、「蘇る力を感じて私は生きている」からは、向かい合うものを得た喜びが伝わってくる。

子供を育てていく。今回も楽しみにしていた作者で、連作を期待したい。

本間一孝「ボイラー・メーカー」は、「実はカクテルの名前です」との種明かしのあと、このボイラー・メーカーにまつわるエピソードが語られ、味わいを増していく。洒落しゃれしていて、気分というものがあがり、上質なエッセイだ。



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ  
東海大学文学部卒  
2002 「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞  
「狼を見る」(文芸思潮) 「ハネムーンきどり」(三田文学)他 短篇映画「ウミスズめし」(脚本) 現職  
在TVのナビ番組などの構成作家としても活動中

## 『だめんず』に消費される女達

### 都築隆広

選考会のわずか数日前、福岡哲司選考委員の計報が届いた。人工透析もなさっていたので、選考会でお会いできない年もあった。それでも、福岡さんがもういらっしやらない

山崎人功「骨を播く」は、母の遺骨を「摺粉木で搗いて」「骨粉」にし、「ここはおふくろの畑だ。そーら、土に還れるよー」と、「茄子に続いて胡瓜の畝やトマトの根元へもばらばらと播いた」という。立派な母と愚かな息子という構図で、面白く、滑稽でもあり、書き慣れた作者であることの方がわけて、難なく読める。しかし、そもそも畑に遺骨を播くというのは、農民の行動としてどうなのだろう。こうした習わしは、土地にはあるのかどうか。騙されてみることにした。

西田信博「斑猫」は、父親が繰り返し語る思い出を、返事をしながら繰り返し聞いて育ち、いつか場面も鮮やかに父親のかわりに登場人物になり、体験していく、といった趣きの作品だ。思い出は戦争が青春だったという時代、場所は「満州の原野」であり、「斑猫」とは、「瑠璃色の背に虹色の斑点」があり、道を教える「美しい虫」だということの「斑猫」に救われるという体験だが、語り手である息子の、「九十三歳」なる父親に向けられる眼差しに、情愛がある。

八束一臣「鶏小屋」は、「子供の頃、屋敷の中の鶏小屋では五十羽ほどの鶏を飼っていた。飼うというより、子供の私には一緒に暮らしている、という感じだった」と語り出される。鶏がいて、家族がいて、時代があり、暮らしが広がり、子供の観察の目が開かれていく。そして体験が、い、お会いできないことを選考中に感じるの、寂しい。空席に差し込む陽射しもやけに眩しかった。ご冥福をお祈りいたします。

悲しみと喪失感からか、偶然か、ほとんど満場一致に近い結果で当選作は「時空を超えて」に決定した。医師が感じる患者の死、そして死後の世界を生々しいタッチで描いた作品である。計報の後に読んだせい、尚更、心に刺さった。

このエッセイが優れている点は二点。書きたいことがはっきりしていて、技術的に優れていること。もう一つは、長年医療に従事してきた立場から、極めて専門的な視点で書かれていること。単純な話ではあるが、「書く技術」と「専門的な経験」の二本柱がしっかりしている応募作は、意外に数少ない。

問題になったのは、ラスト近くで「死ぬ瞬間」という本に触れている点で、この箇所が選考委員一同には、余計であると不評であった。丸谷才一信者の私としては、未知なる書名が登場するとベキッシュな雰囲気醸され、テンションが上がりはしないか? と思ったのだが……そこは読者諸氏のご判断に委ねるとしよう。

今年の応募作中で特に多く感じたのが、働かない男、モラルハラスメント夫、アル中、熟年離婚など、いわゆる「だめんず」に半生を捧げてしまった女達の告白文である。

「だめんず」とはその名の通り、「駄目」な「メンズ」のこと。倉田真由美の漫画「だめんず・うぉ〜か〜」から誕生し、一時期、巷を賑わせた造語だ。作中の男達は年配ばかりだから、今更「だめんず」も糞もないが、それでも今になってこういった内容のエッセイが多いのは、やはり勤勉な女性と怠惰な男性とが、心理学用語でいうところの「共依存」の関係で、「共存」する世の中になったということだろう。

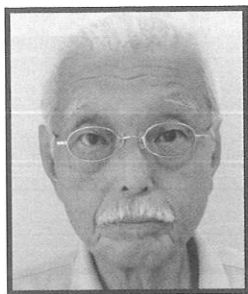
私の周囲でも「だめんず」に悩まされている女性が多い。こういった男達は異性をあの手この手で籠絡し、自分が怠けられる条件が揃ってから馬脚をあらわす。単なる愚図ではなく、狡猾で老獪な人々なのだ。そんな「だめんず」エッセイの中でも、特に評価が高かったのは「流れの先に」と「珈琲を巡る思い」の二作だった。

「流れの先に」は苦勞多き女性の一代記という側面が強く、審査員支持は圧倒的にこちらの方があつた。しかし、抽象的な表現も多く、元凶である夫の行状や精神構造が漠然としてしまっている。観念ではなく、エピソードで人物像を描いて欲しかった。「珈琲を巡る」は「珈琲を淹れさせられていた」という具体的なエピソードがあることと、「モラルハラスメント」と夫の性質がはっきりしているため、こちらを私は最良したくなる。

駄目男もの以外で、審査員支持が集まった作品は「斑

猫」と「骨を播く」。ずば抜けて文章力があつたのは「斑猫」だが、完全に小説の文体になっていたことが残念だった。余談だが、道案内をする虫、「斑猫」は、蟋蟀のような虫を想定していたが、Googleで画像検索したら、顎が大きく、極彩色。仮面ライダーの怪人のような虫が出てきて、吃驚だ。「骨を播く」は、奨励賞となった「カシヤカシヤ」と同じく、散骨がテーマの作品。題材としてはそう珍しくはないが、そこに農業要素とお百姓さんをしてきた母の人生とが絡み合い、カレル・チャペックの「園芸家の一年」を連想するような、牧歌的な味わいがある。連想するといえば、「眉の部屋」や「子牛の涙」などスローライフエッセイで毎年応募してくださる八東さんの「鶏小屋」も、ルナールの「にんじん」や「博物誌」を思い起こさせる作品で、さながらプロ作家のような安定感だ。また、優秀賞の中でも異色の作品だったのは「ボイラー・メーカー」。同名のピアカテルを巡る労働者達の逸話について書かれたもので、内容もさることながら、自分でも簡単に作れる酒という点にも惹かれる。

福岡選考委員の計報もあつてか、死後の世界に思いを巡らす「時空を超えて」が最優秀賞となった。しかし、やはり印象深かったのは「だめんず」系のエッセイ群である。かつて、村上龍が自選小説集を上梓したとき、一巻目の



ふくおか てつし

1948 山梨県甲府市生まれ  
樋口一葉研究会員  
都留文科大学非常勤講師  
著書「評伝深沢七郎ラプソディ」(TBSブリタニカ第3回開高健賞奨励賞)「遠い散歩近い旅・山梨文学散歩」(山梨ふるさと文庫)ほか  
「猫町文庫」編集発行人

文芸思潮

**哀悼** 文芸思潮エッセイ賞の選考委員を十年にわたりに務めてくださった福岡哲司氏に心から哀悼の意を捧げます。

青春小説集を「消費される青春」と名付けた。「青春」を他者によって「消費されるもの」と捉えたネーミングセンスは流石だが、我々の時間、人生の一部が何者かによって損なわれ、消費されるという現象は確かに存在する。悪い男がモテるのは仕方がない。とはいえ、「モラハラ」や「共依存」はもはや個人や夫婦間の問題を越え、広く社会に訴えかけてゆきべきテーマになりつつあるのではないか？  
女性達のペンにそんな問題提起すら感じた、第十一回エッセイ賞であつた。



選考会風景

第11回  
文芸思潮

エッセイ賞

最優秀賞

Essay

一九九八年、私はローマで国際性を体験するための研修に参加していた。アジア、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカから数十名集まっており、自己紹介が順番に義務づけられていた。

日本の地理、人口、産業などを話した後、働いていた病院の紹介をした。創立が昭和六年と古いためか、親子代々に渡る近隣の患者さんが多い。流暢からほど遠い英語のためか会場は静かだった。しかし、

「患者さんは『この病院で死にたい』と言って来られます」

と誇らしく言った途端、大爆笑が起こった。私は、最後の時を安心して過ごせる、という彼らの信頼をありがたく思っていた。しかし他国からの参加者にとって、病院とは

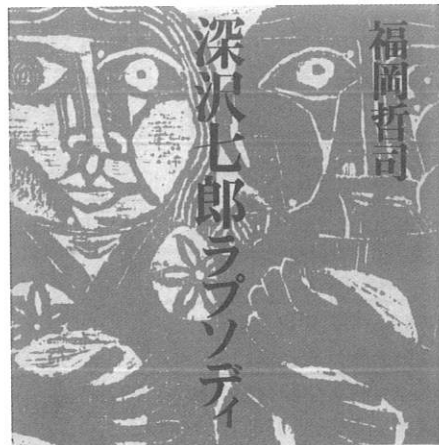
# 時空を超えて

## 岡野真弓

病気を治す所以外ではありえなかったのだ。「死ぬ病院」とは「病人を治せず、死なせてしまう病院」と理解されたことに気が付いた私は心底、くやしかった。しかしうまく説明することが出来ず、黙してしまった。

それから十年後、海外での医療援助から戻って、二〇〇八年から同じ病院に勤めるようになった。最近も「ここで最後を迎えさせてください」と言って訪ねて来る方に出会う。

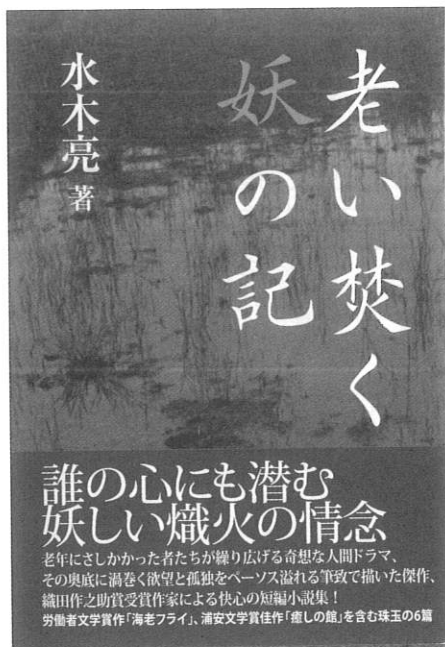
「医師の仕事が病気を治すことだと考えるならば必ず敗北する」と医学生のある教授に言われた。その時にはその真意がわからず、不安と困惑を感じた。敗北する？ それなら連日のハードな勉学と実習は何のためなのだろう、と



第三回  
開高健賞奨励賞!

「底のように生まれ、眞解にまみれて世を去った伝説の作家・深沢七郎。日本人の原風景とされる『楢山節考』、『苗歌川』を生んだ風土とその生きざまを遠い初の本格的評伝。

定価1400円(税別) ISBN 978-4-10-770000-0

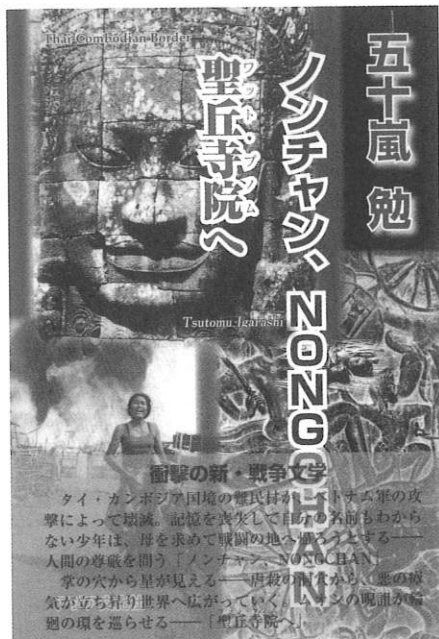


水木亮 著

# 老い焚く 妖の記

誰の心にも潜む  
妖しい熾火の情念

老年にさしかかった者たちが繰り広げる奇想な人間ドラマ。その奥底に満ちる欲望と孤独をベース溢れる筆致で描いた傑作。織田作之助賞受賞作家による快心の短編小説集！  
労働者文学賞作「海老フライ」、浦安文学賞佳作「産しの鮫」を含む珠玉の6篇



# 五十嵐勉

# ノグチヤン、 聖正寺院へ

Tsutomu Igarashi

衝撃の新・戦争文学

タイ・カンボジア国境の難民村が、ベトナム軍の攻撃によって壊滅。記憶を喪失して自分の名前もわからない少年は、母を求めて戦場の地へ出る。——人間の尊厳を問う「ノグチヤン、NOUCHAN」  
家の穴から星が見える——母親の死から、星の病気が立ち昇る世界へ広がっていく。ノグチヤンの魂が戦場の頂を巡らせる——「聖正寺院へ」



# 三日芝居



小さな憤りさえ感じた。

確かに彼が言ったことは正しかった。人は皆死ぬからである。医師となつてからお見送りした方は百人を超えるだろう。では私の歴史は敗北の連続か、といえは、年を追うごとにそうではないとわかつてきた。

この人は助からないのだからと思つた時、医療者は言わば伴走者となる。負け戦とわかつててもその場から逃げずに逝こうとしている人の近くに居続ける。

私が看取るのは病院での死に限っているが、それでも病気の多彩さに加えて、さまざまな社会的状況で亡くなる人がある。老衰とも言える慢性の心不全や繰り返す肺炎の方がんのターミナル（終末期）の方もおられる。そして見送る側にもいろいろある。

「おかあさん。ありがとう」「おばあちゃん！」と耳元で叫ぶ家族に囲まれて最後を迎える人が多いが、親族知人もなく亡くなられる方も結構いらつしやる。これも都心の病院ゆえかもしれない。

身寄りが無い場合は医療ソーシャルワーカーを通して、連絡の途絶えた親族がいないか、探してもらふことになる。離婚した妻がいるらしい、とか数十年会っていない子供がいるらしい、とわかつてくる。しかしその家族が会いに来ないことも往々にしてある。

数年前になるだろうか。アパートの一室で動けなくなつ

「死ぬことはこわくありません」と患者さんに言われたことが何度かある。でも私は自分が今あるように存在しなくなると想像するだけで、足元の地面が崩落するかのような恐怖を感じる。

百人以上の人を見送ってきた経験を思い起こすと、最後まで意識がはつきりしている人はまれである。もとの病気のために少し前から意識レベルが下がるといえば、これはかなり高齢の方々が、食事をほとんど取らなくなる人もいる。いくら勧めても食事をしようという気持ちがないようになるのである。そのようにしてほとんどの人が大なり小なりほんやりとしていく。天の配剤なのか、麻酔がかつたかのような状態で最後を迎える。

耳は最後まで聞こえると言われている。もう一週間もわずかの水分ぐらいしか取らないで、昼夜ずっと寝ているかのように見えた人が、家族が来ると目を開けてうなずく。孫を見て笑顔を見せ、いたわる言葉を発することもある。家族の力は偉大である。

さてこのように徐々に朦朧とした世界に沈んでいく人は夢うつつの中でなつかしい人の面影を見、会話しているのかもしれない。九十代の女性は、見舞いに来た家族の後ろに男の人が見える、と言つたという。誰が見えたのだろう。それはずっと前に死別した夫だったかもしれない、と考えてみるのはロマンチックすぎるだろうか。そうしてみると、

ていたのを発見されたのは、やせ細つた七十代の男性、癌の末期だった。

母親は小さい彼を連れて再婚したそうだ。多くは語らなかつたが、中学卒業後、家を出てしまい、実母とも疎遠になつた。体が動くうちは働いた。

「あのまま家で死んでもよかつた」

自分が治らない病気であるとはわかつていた。もうこれで終わりにしようと思つたのだろうか。彼はそれから一か月、病院で過ごした。実母はどうに亡くなつており、血のつながらない兄たちには、

「迷惑をかけたくない。連絡しないで下さい」と言つた。

痛みの訴えもあまりなかつたが、

「以前の病院ではチューブを入れられ、苦しかつた。もうしないでくれ」

ただ穏やかに過ごすことだけを望んでいた。看護師が薬の乗ったカートを押して部屋に行く。痛みや食事の様子をたずね、清拭を手伝う。痩せた体は清潔なシートに横たわり、ベランダからは朝日が差し込む。それが最後の日々だった。

死ぬのは一回きりの体験だ。その瞬間に何が起つていくのか、どんな気持ちなのか、わからない。正直、私は死がおそろしい。

家族に見守られずに旅立つ人のそばにも懐かしく、愛おしい人が迎えに来ているのかもしれない。

医療者はこの舞台では隅のほうに立つ黒子である。大切なことは、そこで何が起つても舞台から退いてはならないということである。主役を中心とする出演者たちの顔を見守り、必要とされる手を差し伸べながらそこに居続けるのである。

さて、亡くなると不思議なほどに、清らかに輝くような顔になる。それまで自信がなさそうにうつむいていた人も、不安を顔に張り付かせていた人も、すつと顔を天に向けて、迷うことなく旅立つ姿になるのである。「ああ、この人はこんな美しいひとだったのか」と思うことがよくある。そして目の前からはいなくなってしまうのだが、そこから不思議なことが起こることがある。ふとその人の存在をすぐそばに感じるのがある。私には霊感はなく、声が聞こえ、何かが見えたことは一度もない。しかし何のきつかけもなく、その人のことを思い出すのである。この現象は、元氣になつて退院した患者さんには起こらない。

亡くなつてすぐ、その人をすぐそばに感じた時には、亡くなるまでの過程で起きたこと、治療の是非を尋ねる。

「あの治療でよかつたでしょうか」と今は見えない存在に問いかける。AではなくBの治療を選べよかつた、と思

うこともあるからだ。

まだ医者になって間もないころ、二十数年前だが、今のように緩和医療が十分に浸透しておらず、私は経験の浅い研修医だった。その日は休日だったが病院から呼ばれた。末期癌の人が痛み、苦しみを始めた、と言うのだ。

駆けつけると、家族に「あんな苦しみがあるなんて……」と泣かれた。

もともと早くに痛み止めを始めていれば体験させなくてよかった苦しみをその人と家族に負わせてしまったことを私は長い間、気に病んでいた。

しばらくたったころだった。夏休みだったろうか。数日間、勤務から離れることが出来た時、想像の中で彼に話しかけ、痛い思いをさせてしまったことを再度、謝った。

これから先の話はずいぶんと自分に都合の良い妄想と思われるかもしれない。しかしその想像の会話に現れた彼は、意外なことに笑顔だったのである。そして「よくやってくれたよ」という言葉は私のところに浸み込み、後悔という私の痛みを癒してくれたのである。

エリザベス・キューブラー・ロスは『死ぬ瞬間』の著者として、ターミナルケアのパイオニアとして世界中にその名を知られた精神科医だ。その彼女が後年、死後の世界についての著作をあらわすと当時の識者、学者たちは科学的ではないといって批判した。

受賞の言葉

岡野真弓

このたびは最優秀賞をいただき本当にありがとうございます。四月中ごろ、作品に登場する九十代の患者さんをお見送りしました。何年か外来でお付き合いました方でした。亡くなられたお顔がまるで輝くようだったこと、そしてふとした瞬間に笑顔が思い出され、突き動かされるように書き始めました。しめきりまで時間がありませんでしたが、仕上げる事が出来たのは、登場するたくさんの方々から力を注がれていたからに違いありません。

悩み戸惑いながらの二十余年の臨床体験そのものが、貝中にはぐくまれた真珠のごとき宝であったことを、自らの作品を読み直した時に深く感じました。

身に余る大きな評価を与えてくださった選考委員の皆様、深くお礼申し上げます。



どうしてそれまでの自らの業績を貶めるようなことをするのだ、と書かれたものを読んだこともあり、当時、私も同意見だった。しかしこうして臨床の場で多くの人を見送ってくると、先に旅立った彼らとの交流があると思えないことがある。

亡くなられてすぐのころは特に、その人の気配をすぐそばに感じることもあるし、しばらくたったころにでも、ふと思い出すことがある。そういう時には、「ああ、私を訪れてくれているのだ」と懐かしく思う。

その時の彼らからは、まだこの時空に留まる私たちへの思いやりさえ感じる。私たちのありようから超越したところに存在するからだろう。



岡野真弓

おかの まゆみ  
1956 東京生まれ  
92 聖マリアンナ医科大学卒  
現在 都内の病院にて内科医として勤務している



銀華文学賞奨励賞受賞

人は法の裁きによって冷厳にのみ処理されるものなのか。法廷の場で裁断される人間が、苦悶し、叫びをあげる。その生身の声がここにある。裁かれる人間——その姿に肉迫し、叫びと真の思いを描く法廷文学。法と人間の狭間を鋭く突く新鋭小説集

1600円 (税込/送料共)



バブルの開発ラッシュは人を狂わせる……

土地には地霊が潜み、代々の人間が心血を注いで守り育てて来た土地を、いたずらにいじりまわし、迂闊に利用しようとするれば、必ず災厄が降りかかり、その人間を危機に陥れる——土地の開発では人が死ぬ……

1700円 (税込/送料共)

御注文はアジア文化社まで

# 老いの方舟

## 初衣文

突然シャッターを下ろしたように光が消えた。左目の視界が閉ざされ、真っ暗になった。

左目失明は夫をなくし働き手として家族を支えなければならなくなった私が、介護支援専門員（通称ケアマネ）の受験勉強中、疲労が重なって起きた一時的症状だった。

どうにか資格を取り介護支援事業所A会社に就職したのは私が五十歳を過ぎてからだだった。A会社はケアマネが所属する居宅と、ヘルパー派遣の訪問介護、高齢者を預かり入浴や食事を提供する通所介護（デイ）などを兼業していた。退職する先輩ケアマネから利用者（介護保険利用者）を紹介され、実務に慣れる前に、すでに六十二名を担当することになった。当時はまだ、一人のケアマネが担当する利用者数の制限はなかった。

利用者の顔と名前を覚え、サービス内容を把握してみると喉に小骨が引っかかっているような違和感があった。利用者全員A社のサービスを限度枠いっぱいに使っていた。利用者の状況をあらゆる面から分析し、どんなサービスやアシストをすれば自立支援が可能かを勘案し、ケアプランを作成し、サービスに繋げるのだが、ケアプランは何年もコピーしたものを綴じてあった。驚いたことにモニタリング内容もコピーだった。何年も高齢者の状態が変わらないはずもなく、明らかにケアマネの怠慢だった。

貴重な介護保険料を費やしているながら、実際に利用者本人に利する援助はなされていなかった。デイに通い始めたらそこからの卒業はほほえない。

酷い例では一人で八十人も百人も利用者を抱えているケ

アマネもいた。最低、月に一度は利用者宅を訪問し、モニタリングしてプランを見直す義務があるが、八十人以上も担当していて個別訪問は時間的に無理である。短時間に利用者宅の郵便ポストにプランを流れ作業的に放り込み、シヤチハタの印鑑を利用者全員分買い揃え、ケアマネ自身が押印し、個人ファイルに綴じて保管する。私はそのベテランケアマネの一連の作業を目撃し、固まった。ケアマネの手数料は利用者一人に対し要介護一だと一万円だったから、まさに濡れ手で粟状態である。ケアプランは審査、指導がないから野放しで通用する。利用者が一割負担で、介護保険負担は九割だから、莫大な費用が湯水のように費やされ、財政を圧迫し、介護保険制度を破綻させるのは当然の成り行きである。監査も一応、何年ごとかにはあるが、医師からの密告でもない限り、通り一遍に表層をさっと一撫ぜして終わる。プランやモニタリングのコピーにさえ気付かない。しかも事前通告するから書類の改竄を奨励しているようなものだった。

入社して間もなく会社の定期会議があった。月初めに設定した目標達成について、上司から厳しい追求があり、台風など不可抗力な理由でサービスを休んだ場合、その損失をどう取り返すかの方策を発表しなければならず、利用者の話よりも利益追求が主眼だった。

会議の後、「慣れましたか」と上司から声をかけられた。

「ケアマネ養成講座と随分違う内容なので戸惑っています」と、私は率直に応えた。「会社経営を継続していくためには利益を上げないといけないし、ケアマネの給料だって払えませんか」やや切り口上に上司は言い放った。よりましな職場を求め、何度か事業所を移ったが、いずこも似たり寄ったりだった。医師が経営するある事業所では、同系列のサービス事業所を九パーセント以上利用に結び付けられない有料老人ホームの管理者は、呼びつけられ厳しく叱責され、給料にも反映するということだった。介護保険は商売のように景気の影響を受けないし、未回収の心配もないから介護保険事業に参入する者は多かった。

私が不思議だったのは、その有料老人ホームで暮らす高齢者の多くが生活保護受給者で（生活保護受給者は介護保険の一割負担がない）ほとんどが限度枠いっぱいサービスを利用している事実を、行政が把握しているながら放置していることだった。ホームの入居者は「しんどいきデイへ行きたいけど、行かんと怒られる」とこぼしていた。経営者の身内が市の幹部や議員だという噂があったが真実は分からない。「デイが空いたので利用者まわしてください」「この利用者に週三回ヘルパーを付けるのでプランに入れてください」などと指示され、ケアマネがプランを勘案しケア会議にかけて承認されるのではなく、サービス事業者側からの命令で書類上の処理をさせられる、本末転

例が公然と行われていた。異を唱えようと涙みを帯びて拒否され怖かった。

介護保険は介護が必要になっても、住み慣れた地域で生活できるような社会全体で支えていくことをスローガンに、平成十二年四月から施行された。ホテルがわりに長期入院する高齢者を自宅に帰し、うなぎのぼりの医療費を抑える狙いがあったのだろう。役人が机上で練り上げた介護保険制度は、街角から日向ぼっこするお年寄りたちをデイに連れ去り財政圧迫の要因となった。

それまでは、あちこちに多少の不具合はあっても年だからこんなものと、我が身を励ましながら暮らしていた高齢者たちは、業者の猛烈な勧誘に呼応し介護保険を利用しないと思ふとばかりに申請するようになった。結果、軽度の介護保険利用者があふれた。三年毎の見直しがあり（私が退職してだいぶ経つので）制度は大きく変化していると思ふが、介護保険制度が財政を圧迫していることに違いはない。袋の裂け目を放置したまま、資金を継ぎ足し続けても金はどんどん流失する。この悪法を矯正しない限り仰向いて唾を吐くように虚しい。

介護保険を利用していない高齢者にとって年金のみのギリギリの暮らしから天引きされる介護保険料は、苛徴請求に喘ぐ重税に等しい。老人福祉の費用補填のため消費税を上げるなどは、政策の失敗を押し付ける二重の搾

もに言えない苦労をケアマネを使って解決しようとし、子どもはケアマネ頼みで逃げ腰になり、また、同居してお互い気付く棘もある。

介護保険は万能ではない。古来、人間社会が行ってきた隣人や家族、親類のほんの少しの助けや心配りが、どれだけ人を勇気付けるかわからない。

現在の介護保険制度を改善するのは、なかなか困難だと思う。プランを立てるケアマネと、プランを受けてサービスを展開する事業所と相対する関係性の両者が、同経営者の下で兼業するのが、そもそも不条理の根底ではないか。ケアマネを利用し、欲しいだけのサービスを提供し、利益を生み出せるからだ。現に多くの事業者がそれをやっている。

プランの審査、指導には多くの人手と時間を要する。業者のモラル育成などは不可能だ。

しかし、どこかで大錠を振るう覚悟を固めないと、資金地獄は延々、続くのだ。そして善良な国民や、高齢者が苦しめられなければならない。

私の拙い経験からすると、ケアマネ業務はあまりにも複雑で、書類作成に追われ、そのみが仕事の主流となって、本来大切な利用者との交流がおろそかになった時期もあった。書類を簡素化し、実践しやすく現実に工夫することですつまらない粉飾に思い悩むことなく、良い仕事ができ、

取であり、理不尽である。国は人の性善説に立ちどんな事業者にも、等し並に介護保険事業を負託し、現在の収集つかない状態を招いた。施設経営にやたら厳しく見当違いな改革をしていると、昔の同僚が嘆いていたが、改革、改善は難しいだろうと察する。

介護保険では高齢者の命に関わるような緊急事態では、プランがなくてもどんなサービスを使っても良いことになっている。けれど、平常時にもケアマネと事業者が馴れ合って勝手にサービスを提供し、ケアマネが後処理をすることは普通に横行していた。それをするケアマネが腕が立つと評価されてもいた。自分の仕事に疑問を抱くケアマネは、ほほいかなかった。私が剛直すぎるのかもしれない、悩んだこともあった。

団塊世代が一気に高齢化するのには目前だ。多くの疾病や認知症を抱えた高齢者がどつと乗り込んでくる。介護保険は老いの方舟である。方舟は高齢者に快い終の栖となるだろうか。

介護保険関係者にも誠実な人はいる。行政が頑張つて公民館での体操やレクリエーションを実施し、日向ぼっこするお年寄りが、街角へ戻りつつある地域も見られるそうだ。赤ちゃんや高齢者や障害を持つ人、若者等が交流し時を共有するのが人間社会のあるべき姿だ。介護保険施行以来、親子の絆が薄くなっているようにも感じられる。親は子ど

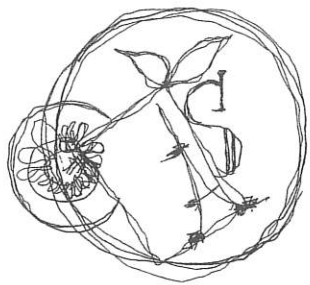
ケアマネの疲労も減るだろう。

あらゆる生物は、生まれた瞬間から死に向かって歩き始める。あたりまえだけど、これだけはどんな境遇の人にも平等な運命であり、誰も避けることのできない行く道である。だからこそ私は、日々を精いっぱい有意義に心残りなく過ごしたい。

人生に厳しさ辛さは付きものだけれど、『良い人生だった』と振り返り、縁ある全ての人たちに感謝したい。

ノアの方舟は墮落した社会を再生するため神が善良なノアたち家族と、動物等に乗せ希望の新天地、アララト山に漂着したが、老いの方舟はどこへたどり着くだろう。姥捨て山には流れ着かないで、と願っている。

※現在、一人のケアマネが担当する利用者数は制限があるそうです。



第1回  
文芸志願  
エッセイ賞  
優秀賞

# 流れの先に

団地の裏を小名木川が流れている。波ともいえぬ波形をつくり、風のそよぎでサワサワと揺れる。茜色の空と、赤橙の熟れた果実のような落陽を、水面に映しながら静かにたゆたっている。都会の風景の中にも、心をとらえる自然が在るものだ。

越して間もない団地の三階の部屋は、西日がきつくと、カーテンを引きながら、私はいつも沈む夕日を見ていた。底知れない悲しさが広がる、そんな夕焼けの空だった。

別れて二年もせずに急逝した夫。子供たちと追いついてられるように弔いをすませたこの冬。手術、入院を重ねた後の、自宅での突然死、孤独死だった。発見されるのに三日のあいだがあったらしいと、混乱と疲れの中で娘が連絡をくれた。離婚の経緯さえ整理しかねている上に、その存

# 本間淑子

在が現実世界になくなってしまったことへの、憤懣のような感情は、思った以上に続いたと後になって気付く。「不在」という理不尽さに、言い知れぬ虚しさが襲う。「四十九日」といわれる日々、彼の気配を私は部屋の中で感じていた。大雪の一月半ば、部屋の空気は濃さを増し、二月になるとそれはいつしか消えていた。四十二年一緒だった夫だが、離婚の過程でみた醜悪さに、強い拒絶感を持つてしまった私は、彼の最期を何ひとつ見守ることなく終わってしまつた。この強情と苛酷な性格をもてあまし、やりきれなさや切なさで呆然と過ごした、冬から春への五ヵ月余りだった。

窓の外の夕日は、重なり合うビルに遮られ、途中で視界から姿を消してしまう。沈みゆく先を見届けられない落ち



初衣 文

はつごろも ふみ

1947 高知県生まれ  
地元高校卒業後、勤労の傍ら同人誌「骨」  
「白色音」で創作活動  
第1回大原富枝賞 優良賞受賞  
書店未来研究会 小論文入選  
全国書店新聞 1000号記念懸賞論文入選

## 受賞の言葉

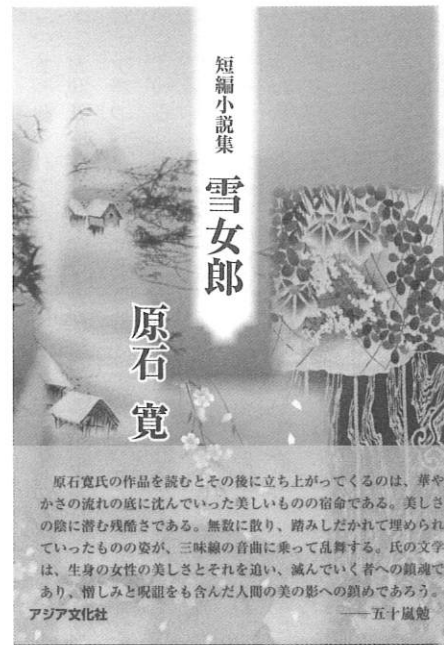
初衣 文

介護保険専門員の職を辞したあとも、制度の矛盾は常に私の心の中に棘となって在り続けた。この制度が現状のままなら、高齢者福祉の財政負担は果てしなく垂れ流されることだろう。

この度、「老いの方舟」を社会批評賞に選んでいただき、長い鬱憤を掬い取ってくださってありがとうございます。



タイのすべてがここに  
特価 2000円 (税込/送料共)



原石寛畢生の短編小説集  
1600円 (税込/送料共)

御注文はアジア文化社まで

着きの悪さが、折り合いのつけ難い葛藤の中の私を、突き動かしたのか。小名木川に沿って、行けるところまで歩いてみよう。落日の先を追ってみたい。そう思い立ったのは、何かを納得したい焦燥からだったろう。

かすむような淡い空気の中、早朝家を出て、番所橋の下り口から、小名木川の遊歩道に立った。揺らぎのない静かな川面。遙かにまっすぐ流れは続いている。江戸の頃、行徳から日本橋まで塩を運ぶためにつくられた運河だと聞く「塩の道」。先の先まで高低差の少ない水面が光っている。対岸には、赤や青、黒の大小の鯉のほりが、十尾以上も一本のロープに繋がれ、同じ向きに列をなしてはためいていた。

親子して慎ましく睦まじく暮らした、遠い昔の記憶がよみがえる。「変わらないものなどないのだ」という真理は、年を重ねてようやく苦い想いで腑に落ちて来るものか。

大学在学中の妊娠で親を怒らせ、勘当同然の道行きみたいな私達の出発だった。貧しく先も見えずに暮らした筑豊は、多くの人々と出会い、幼ない子らを育てて過ごした幸せな時間でもあった。青春の曲折を経て、始めた本屋の失敗で、かさんだ負債の大きさに苦しみ過ごした三十一四十代。借金と女性問題が同時に襲った最悪の日々。信じる筋

四十余年が嘘のように消えて行く。

丸八橋、砂島橋、進開橋を頭上に越えて、遊歩道は続く。朝の散歩を楽しむ老人たち、ジョギングの若い男女、犬を連れて散歩する人達とすれちがう。橋の上には、はやばやと人と車が行き交っている。記憶を反芻しながら、ゆっくりと歩き続けた。

彼から電話があったのは亡くなる前日の昼だった。二年近くたっても、声を聞くだけで不安定になる私は、呼び出し音を無視した。あの時なにを話しかったのか、過ぎた時間を戻すことはできない。冷え込んだ師走の夜、病を抱えたひとり暮らしは、どれ程心細く辛かったことだろう。それなりの理由があるとはいえ、長い年月一緒だったひとを、頑ななままに寂しく逝かせてしまった自分の固い殻を、呪わずにはいられない。

遊歩道は途中で途切れ、まだ工事中のようだ。街中の川沿いの道を歩きながら、三本の橋を通り過ぎ、再び新扇橋、新高橋を頭上に見ながらぐり抜け、視線は先の高橋をとらえた。深川から両国、浅草へのびる下町の架橋。離婚後二年のあいだ、ひっそり暮らした深川の街は、寺の多い門前仲町に近い古くからの土地で、橋上の様子は、懐かしい

を失い、空疎に浮遊する神経で、毎日を綱渡りしていた私だった。両親の不和は、子供たちをどれ程不安にさせただろうか。いさかいのあげく出て行こうとする夫を追って、「お母さんも大事だけど、お父さんもいるの」と引き留めた、小学生の娘の必死さがあった。感情に埋もれ、子供たちを忘れていた自分が愚かで哀しく、その恥ずかしさが、私を現実に取り戻していった。「どんなであつても、心を縛ってでも、この先十年、きつとやりぬく」と覚悟を決めた時だった。親や係累を巻き込んだ借金を、歯がみする想いで返し終えた十三年。それは子供たちが育つていった日々であり、私を強くしてくれた時間でもあった。

身勝手さと依存性の強さ、精神の弱さを、夫の中に気付いていても、拒否と受容を繰り返しながら、夫婦、家族の時間は積み重なって行く。子供たちの両親であり続けたいという願いが、関係を継続する方便だったのか。その後上京してからの、子供がみんな独立していった時間の中で、対峙すべき機会を何度もやり過ごし、私達は六十代の老いを迎えた。残酷な時間の堆積。時とともに劣化する人間性と関係性。

コントロール不能のように、思いもかけない「支配の論理」を持ち出して来る夫のいじましさを、私は到底受け容れることができなかつた。長い年月に培われた情愛も、本性への信頼も、冷え冷えと凍りつき何も残らなかつた。

街のにおいを思い出させる。振り仰ぐと、屈託など忘れさせるような、澄んだ五月晴れの空が広がっていた。

六十二才の单身になろうとする老女が、やすやすとアパートなど借りるのは難しく、経済的にもぎりぎりの条件しか持たなかつた私にとって、社会の仕組みの過酷さに崩れそうになる部屋探しだった。酒害のせいなのか、妄想で暴力的になる夫を避け、ビジネスホテルから仕事場に通い、仕事が終わると不動産屋を駆け巡った。心が折れそうになりながら、途方にくれながら、出発を準備するしかなかつた。僅かな蓄えも底をつきそうだった。

人生も終りに近く、独りになるという直滑降のような恐怖感と脱力感。深川の穴倉のような古アパートで、傷をなめながら潜む獣みたいに、身を丸めて過ごした日々が蘇る。江戸が舞台の時代小説を好んで読んで私には、浮き沈みしながら生きた人々の姿が自分と重なり、そんな連なりのひとりなのだと思うことで、慰められることも多かつた。仕事を待つ日常と、子供や友人の存在に支えられ、なんとかやり過ごした毎日だった。

高橋の下をぐり、先を急ぐと水門にぶつかる。土地勘のない私には、水門の高さのせいで先の風景が予想できない。ここまでもう一時間半は経っているだろう。上の道に

移り、通り越した小名木川水門。万年橋のわきの細い道を下り、再び遊歩道に戻った。広々とした堤に出た瞬間、目の前には、滔々と流れる大きな墨田川があった。果てしなく重厚な流れに圧倒され、思わず感嘆の声がでる。視界の広がる驚くほど開かれた光景。解放感が身体の隅々まで広がって行く。悠揚と流れる大川は、身動きとれなくなるほどの衝撃的な豊かさだった。小名木川と大川の合流地点に行き着いたのだ。

川の向こうには日本橋の街並みが見える。林立するビル群はおもちゃのように小さく、首都高速だろうか、たぐさんの走行中の車が目に入る。流れの先には、しなやかに清洲橋が架かっている。すべてが美しく輝いて、流れはあらゆるものを浄化していくようだった。

夕日は、この川の先、さらに先の街を越え、多くの土地を過ぎ越えて、遙か西の果てに消えるのだらう。深い夜を想う静謐な時空の中に、私はしばらくの間たずんでいた。「もういい。全てあったこと。それでいい。そのままに覚えていよう。いつかそのまま忘れよう。こうして過ぎた長い時間があったということだけでいい」突然、私にはそう思えた。

たとえ幻想に彩られ、過ぎて来たのかもしれない四十余年であったとしても、そのすべてを否定する気持ちに、今はならない。それは私が私であった時間であり、ひとを愛

受賞の言葉

本間淑子

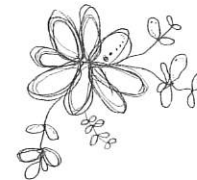
受賞の連絡をいただいた時、自分のこととは思えず、実感がなく、きよとんとしてしまいました。

エッセイなるものが、どういうものかもよく分からないまま、書き留めておきたい、記しておきたいという衝動が湧いて来たのは、一年前の三月のことです。大人になって初めて書いた「作文」が、昨年エッセイ賞の入選となり、ずいぶん勇気をいただきました。今回はもうすこしましなものができたらと願って書いたのですが、それが優秀賞という評価をいただくなど、思ってもいませんでした。すなおに嬉しさがこみあげて来ます。ありがとうございます。自分では、精いっぱい生きてきたつもりですが、乱暴な生き方ゆえに、積る後悔もひと一倍のような気がします。そういう悔いの塊を解きほぐし、自分と向き合う術として、「書く」ということが、私のこれからを支えてくれるように思っています。

深くかかわった人たちへの愛おしさが、書こうという動機になっているのかもしれない。そこを出発点として、視点や視界を広げ、見る力を確かなものにしていけたらと願うものです。想いを的確に表現できる「ことば」を、手に入れたいと心から望みます。

し、愛された時間でもあるのだから。人は愚かしくも哀しくも、予想もしない経緯を生きて、終わりを迎えるものらしい。彼も私も、わけもなく愛おしい人間ということなのか。

今でも時折、窓の向うの茜空を眺めながら、緩やかに蘇る力を感じて私は生きている。小名木川は今日も静かに流れ、隅田川に注ぎ入り、はるかな海へと続いて行くのだから。



本間淑子

ほんまとしこ

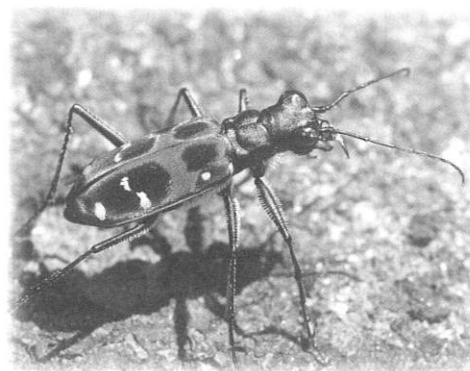
1948 新潟県佐渡市に生まれる  
53～66 秋田県鹿角市にて育つ  
69 東北大学文学部中退  
東京都、福岡県中間市、大阪市、新潟市に居住  
95～東京都在住  
保育士、絵本児童書専門店手伝い、塾講師、その他様々な職業を経て、現在調理師として在職中



中野睦夫さん(第2回銀華文学賞受賞者)が「贄のとき」で第25回早稲田文学新人賞を受賞しました。おめでとうございます。

8月3日の授賞式で



斑猫 はんみょう

## 西田信博

蒼い山蔭に白銀の入道雲がわき、人影もない野道の向こうに陽炎がゆれている。

耳にうつろう熊蟬の声、野面を渡る風の音。

ふと見れば、陽光に背を光らせた斑猫が一匹、私の足下で道を教えている。

追えば逃げ、止まればからかうように近づく美しい虫、瑠璃色の背に虹色の斑点が夏の陽射しに照り映えている。

私はわざと大きく足を踏み出す。斑猫は地を這うように跳び、ふり返って小首をかしげる。幼い頃、この美しい虫を追ひ、野道をさまよったことが幾度あったろうか。

ハンミョウよ、どこへ行く道を教える。私をどこへ導いて行く。

ハンケチで額の汗をぬぐい、坂を見上げる。

若い父を子供のように愛しんでくれた大隊長は、騎馬のまま、全身に機関銃の銃弾を受け、右手に軍刀を握りしめ、泥のなかに倒れ伏していた。

泣く暇もなく、嘆いている時間もなく、父達は逃げた。

牡丹江へ行けば、まだ健在な部隊が存在するはずである。

コサツク兵の機関銃に追われ、熊に襲われ、ソビエトの戦車に追われ、武器もなく、父達は餓えながら逃げた。

幹線道路には逃げまどう民間人が溢れていた。押しつけ、駆け抜け、助けてくれと縋る親子を振り切って兵士達は逃げた。

「どげんも、……でけんだろうが。鉄砲もなかとに……」

戦車に轢殺される人々、夏の陽炎の道で、戦闘機の機銃掃射に血しぶきをあげて倒れていく女子供……。

夏の野道で、父達は襤褸布のようになりながら、彷徨い歩いていった。

小さな道は二股に分岐していた。

貨車が路傍に置き棄てられていた。

先頭付近を歩いていた父の足下に、斑猫がとまった。

「斑猫ばい……」

思考力を失っていた父の網膜に、その美しい斑点が、魔術のように揺れ動いた。

斑猫は貨車のない道に父を導いた。

無意識に父は斑猫を追ひ、左の道を歩き始め、後続の兵

ゆつたりと迂りあがった坂道の上に、小さな火見櫓の半鐘が櫓の古木の間から顔をみせている。あの櫓の向こうに小さな鈍色の屋根瓦があり、平屋の庇が蔭をつくる庭に、老父が一人佇んでいるはずであった。

七十年の遠い昔、満州の原野で、斑猫に命を救われた老兵がそこにいる。

そのとき父は、満州の原野をさまよっていた。

牡丹江へ、牡丹江へ、呪詛のように眩きながら逃げる父の小隊は、その前夜、ソビエト戦車隊への肉弾攻撃に失敗し、所属部隊へと撤退していた。だが朝焼けの駐屯地で目にしたものは、累々と横たわる同胞の死骸だけだった。

すでに部隊はソビエト機甲師団に襲われ全滅していたのである。

士達も父の後に続いた。

「おい、なんばしょつと、そら違うだろが。こつちばい」顔を上げると、二十メートルほど離れてしまった道に、

先頭を歩いていた戦友が立ち、こちらを手招いていた。戦友の背後には、路傍に置き棄てられ錆びを浮かせた貨車が草に埋もれていた。

父達は顔を合わせ、かすかに笑い、道を戻ろうとした。

そのとき、鋭く空気が切り裂かれた。

兵士の習性で父達は本能的に伏せようとした。

爆風と衝撃音が身体を撃ち、一時的に聴覚を失った。網膜に消し飛ぶ貨車と戦友がコマ送りのように映り込んでいった。

「手首だけが田圃に落ちちよった。……なんも、残つたらんかったよ」

爆音が頭上を過ぎ、夏の大地に戦闘機の影が、魔物のように飛び去って行った。

父は激痛を感じ、左耳の後ろをさぐった。掌にはべつとりと血糊がついていた。

「その破片、いかげんにお医者さんに取ってもらったら……」

数百回も言つたろうか、同じ質問に、父はすこしばつが悪そうな表情をうかべながら、

「まあ、よかたい……もう身体の一部だけん」



と、やはり数百回目の応えを眩しながら、左耳の後ろをなでた。

父はよく唄を口ずさむ。唄えば思い出が甦る。甦ればとりとめもなく語り始めた。

聞き手は末子の私一人である。

老母が苦笑して言う。

「政府がね、シベリヤ抑留兵にお金をくれたんだよ」

「これが地獄のご褒美げな……」

父は剥げて一枚の通知書をひらひらと泳がせてみせた。

八月十六日、無条件降伏に遅れること一日、父達は牡丹江に駐屯した部隊ごと、ソビエト軍の捕虜となった。父達、肉弾攻撃の失敗組の背中には、再び二十キロの爆薬がくくりつけられていた。父は爆薬を背中から外し、地面に置き、他の兵もそれに倣った。もはや誰も咎める者はいなかった。日本兵は豚のように貨車に詰め込まれ、シベリヤの大地を抑留地へと送られて行った。父のイルクーツクの収容所は、ドイツ兵の収容所と隣接していたという。地獄のシベリヤ強制労働の生活である。

輸送される貨車のなかで、父は扉の小さな隙間から、シベリアの大地をさがるように見つめていた。光の漏れる小さな隙間からは、見はるかす大地の彼方まで広がる、白樺の森が続いていた。

「夕陽があたると、美しゅうしてね、……忘れられんと

……」

父は三日間の間、扉にすがり続けていた。

一年三百六十五日、十年で三十六百五十回、二十年で七千回。同じ話の繰り返しの間に、私はときに倦いて、愛する伯父に愚痴をこぼしたものである。伯父はその海よりも深く優しい瞳で私の顔をのぞき込み、肩に手を置いて言った。「坊よ、聞いてあげるがよか。あれはなあ、お父さんの青春だけなあ」

その伯父が昨年他界し、父は唯一残っていた友を失った。庭に小さな門扉がある。

傾き始めた陽射しの庭に、老いた父の背中があり、傍らに老犬が坐っている。名を勘太という。勘太は物憂そうに立ち上がり、私に挨拶をする。門扉が軋んで私を迎える。老いた父はゆっくりとふり返り、皺を幾層倍にして笑った。

「ハンミョウの話の聞きにきたよ」

父は声にならぬ笑いを浮かべる。

「なんば言よるとか……こんばかたれがあ……」

まあ上がるとよか、そっくりながら縁側へ覚えない足取りを運び、勘太が後に続いて行く。

父の口から小さく唄が漏れる。収容所生活の時、ソビエト兵に教えたという「伊那の勘太郎」の歌である。今日は収容所の話から始まるらしい。

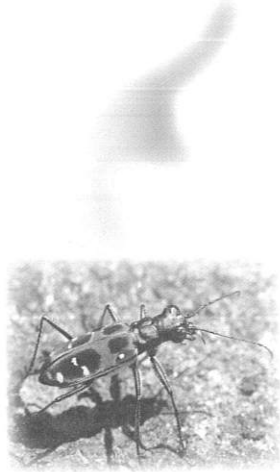
受賞の言葉

西田信博

「時」は命の総てを与え、同時に総てを奪って行きます。年齢を重ねるということは、得た物すべてを天に返却していくということなのかもしれません。

父は今、人生の末端に生きています。すでに人生の多くを天に返却し、今は孤独を友として手を繋ぎ生きています。そして絶対の孤独である「死」が彼の肩に片手をかけ、静かに微笑んでいることを、彼自身が知っています。父の青春と戦争物語は、「時」に奪われたものへの残光と、それを写す鏡の虚像です。

私はその虚像を短い文章で遺してみたいと思いました。それが総てを失いつつある父と失った物へのささやかな愛情であるように思えたからです。



西田信博

にしだ のぶひろ

1976 農林水産省入省  
システム専門官  
2013 退職  
第11回銀華文学賞歴史小説奨励賞  
現在59歳。妻一名、高齢犬二匹、  
超高齢猫(21歳)と同居中

## ボイラー・メーカー

## 本間一孝

Essay

「ボイラー・メーカー」  
これが何かご存じでしょうか？

外国の人の名前。いいえ、違います。もしかしたら、そういう名前の外国の人がいるかもしれませんが、私の言うボイラー・メーカーはそうではありません。  
実はカクテルの名前です。

作り方はいたって簡単。ウイスキーを入れたグラスにビールを注ぐだけです。バーなどでは、ビールを入れたグラスの中にウイスキーを入れたショット・グラスを沈めて作るようですが、居酒屋専門の私です。そんな洒落たものには縁がありません。

このような講釈を書きましたが、私がボイラー・メーカーがカクテルの名前だと知ったのは、いえ、認知したのは、最初にこれを飲んでからずいぶん経ってからのことでした。

なんてとんでもない話ですが、これも昭和四十年代の思い出話として大目に見ていただければと思います。

その幼い私がコップ一杯のビールをちびちびと飲む間、父たちはビールにウイスキーを入れて飲んでいました。もちろん、父も同僚の人たちも、ボイラー・メーカーなんてカクテルのことは知りません。ただ、ビールでは物足りないのでウイスキーを入れて飲んでいただけでした。

月日は流れ、大学三年生の夏休み。私はある工場でアルバイトをした時に再びボイラー・メーカーに遭遇しました。

工場内は冷房が効いていても快適でしたが、結構な力仕事のため、私たち学生アルバイトはいつも汗びっしょりとなりました。だから、仕事が終わると工場内の風呂場で汗を流ささせていただきました。その風呂上がり、私たちは毎回、工場の人たちから缶ビールをご馳走になりました。

その工場で働いていた人は皆さんお酒が強かったのですが、鉄ちゃんと呼ばれていたお調子者のボイラー技士は特に酒豪でした。鉄ちゃんはみんなが缶ビールを飲んでいて、決まって持参したウイスキーを缶ビールの中に注いでまわります。私が子供の頃に父たちが飲んでいたものと一緒に飲んだ。

「ビールにウイスキーを入れた飲み物のことをボイラー・メーカーって言うんだぞ」

ある日、鉄ちゃんが得意げに言いました。でも、工場の

私の父はボイラー技士として、小さな食品会社の工場に働いていました。汗をたくさんかくので、会社の風呂に入ってから帰宅するのですが、その父はいつも上機嫌で帰ってきました。なぜなら、風呂上りに会社の食堂で同僚の人たちと一杯やってくるからです。

四十年以上も前のこと。私が小学校に上がるまで住んでいたのは、父の会社の傍にあるアパートでした。幼い私は、父を迎えによく会社まで行きました。早く父に会いたい、遊んでもらいたいという子供らしい理由の他に、もう一つ、あまり感心しない理由があったからです。それは、父たちが風呂上りに飲むビールのお相伴にあずかるためです。

はじめは、父の同僚の人が面白がって私にビールを飲ませたのですが、なぜか幼い私には美味しく感じたのです。それ以来、父の会社へ行くと、ジュースではなくビールをご馳走になりました。今なら小さな子供がビールを飲むな

人たちはその言葉を信じません。

「鉄ちゃんのようなボイラー技士が飲むからボイラー・メーカーなのか？」

誰かがからかうように言うと、  
「理由は知らないけど、とにかくボイラー・メーカーって言うらしい。お前たちは学があるんだから知ってるだろう？」

鉄ちゃんは、今度は私たち学生アルバイトに尋ねてきます。もちろん私たちも知りませんので首を横に振ります。すると、鉄ちゃんは残念そうに顔をしかめて呟きました。

「本当にボイラー・メーカーって言うんだけどな……」

そのボイラー・メーカー。初めて飲んだ時はアルコールが強過ぎるように思えたのですが、夏休みが終わる頃にはすっかり美味しくなっていました。私は工場のアルバイトを辞めた後も、しばらくの間ビールにウイスキーを入れて飲んでいました。

その後、大学を卒業した私は出版社に就職しました。その出版社時代、お酒好きの先生のお伴でホテルのバーに行きました。そこで、メニューのカクテル欄に載っているボイラー・メーカーを発見したのです。

（これは父や鉄ちゃんたちが飲んでいたボイラー・メーカーなんだろうか）

私は疑念を抱きながらも、懐かしさと好奇心を抑えきれ

ず、競馬で大穴を狙う様な心持ちでポイラー・メーカーを注文しました。そして、しばらくじりじりと待っていると、先生が頼んだウイスキーの水割りとともに、黄金色の液体の入ったグラスの底にシヨット・グラスが沈んでいる飲み物が運ばれてきました。

「何なんだ、それは？」

私の前に置かれたカクテルを見て目を丸くする先生に、ウエイターが説明します。

「これはポイラー・メーカーと言って、ビールを入れたグラスの中にウイスキーを入れたシヨット・グラスを沈めたものです」

私の脳裏には、美味しそうにポイラー・メーカーを飲んでいた鉄ちゃんの赤ら顔が浮かんできました。思わずにやりと微笑むと、先生が見守る中、ごくりと一口飲んでみました。

「美味しいの？」先生が興味津々の様子で尋ねてきました。

「ただのウイスキーのビール割です」

「なるんだ。つまらない」私の答えに、先生は拍子抜けした顔になりました。

だけれども、その時の私は先生以上に拍子抜けしてました。学生の頃に飲んだポイラー・メーカーは本当に美味しかったのですが、ホテルで飲んだものは、それほど美味しくなかったのです。高級ホテルのバーです。ビールもウ

イスキーも上等なものを使っていたと思うのですが……。

二年ほど前、私は長年勤めた出版社をリストラされました。残念ながら、出版関係の仕事は見つからず、今は派遣社員として警備の仕事やいろいろな工場で働く毎日です。正直、辛い事ばかりですが、たまには良いこともあります。

今年の夏、石鹸工場で働きました。朝から晩まで重い材料を運ぶ仕事で汗をたくさんかきました。ですから、仕事が終わった後は工場の風呂でさっぱりしてから帰宅するのが常でした。昔の父や学生時代の自分のことを思い出し、久々に気合が入りました。

その工場からの帰り道に美味しそうな焼き鳥屋さんがありました。ですが、正社員として働く女房殿の手前、しばらくは素通りしていました。そんなある日、店の外の看板に『ウイスキーのビール割』とあるのに気付きました。我慢できなくなった私は、すぐに暖簾をくぐり、ウイスキーのビール割を注文しました。

ほどなくして、無愛想なお兄さんが運んできた黄金色の液体が入ったグラスには、もちろんのことシヨット・グラスなんて沈んでいません。でも、これいいのです。私はキンキンに冷えたグラスを持ち上げると、ゴクゴクと渴いた体に流し込みました。

うまい！ まさに、学生時代に飲んだ時の感覚と一緒に

### 受賞の言葉

### 本問一孝

この度は「文芸思潮エッセイ賞」の優秀賞をいただき、ありがとうございます。嬉しいという思いとともに、まさかの出来事で驚いております。

私事になりますが、図らずも二年ほど前から、仕事をしながらではありますが執筆活動を本格化させました。この間、いくつかのエッセイ賞や文学賞へ応募したのですが、歯がゆい結果ばかりが続き、気落ちすることも少なくありませんでした。ですから、今回の受賞も夢ではないかと、わが身を疑う毎日です（どうやら夢ではないようです）。

家族も、我がことのように大変喜んでくれており、少しばかりほっとしています。なにより、今後の執筆活動への励みとなりました。

さて、先日のこと。インターネットでポイラー・メーカーのことを調べてみました。すると、名前の由来の一つに『アメリカのポイラー建設に従事していた作業員たちが、ビールの中にウイスキーを入れて飲んだことがはじまり』と書いてありました。

まさに、父や鉄ちゃんのようなポイラー技士のための飲み物だと思いました。それで分かりました。肉体労働をして汗を流した後に飲んでこそ、ポイラー・メーカーが美味しく感じるのだと……。

現在、ポイラー技士として定年まで働いた父は、打ち込む趣味もなく家でゴロゴロしてばかりいます。毎晩、晩酌をしています。飲んでいるのは焼酎です。たぶん、今の父が一番美味しく感じるのが焼酎なんだと思います。

私はそんな父を近いうちに散歩に誘おうと思っています。それも少し遠くへ。そして、たくさん汗をかいて風呂に入ってさっぱりします。それから、今は少しばかり元気のない私たちが再び輝けるように乾杯をします。

もちろん、古き良き時代の思い出がいっぱい詰まった『ポイラー・メーカー』で。



本問一孝



ほんま かずたか

1966 神奈川県生まれ  
大学在学中から約5年間、フリーライター教室で学ぶ  
その後、公務員を経て出版社に勤務  
現在は派遣社員として働きながら、執筆活動を続ける

# 麓の街

小野友貴枝

富士の麓の街、御殿場の病院で、看護学生の夏休みアルバイトをしたことを思い出した。

なぜ、急に思い出したのか、自分に問いかけてみた。

最近のマスコミはしきりに戦争体験をシリーズ化し、完全保障法制の協議が新聞のトップ記事になっている。また自衛隊を海外に随時派遣できる国際平和支援法が議論され、急に世の中が物騒になった。戦後七十年、戦争体験を忘れかけている人への警鐘のように不安材料が増えてきたからだ。

私は戦後教育を受けたが、戦争のせいで貧しい生活を余儀なくされた一人だ。両親が二十一年、二十三年に亡くなり、戦地から帰還した長兄は、結核を患っていた。私の生家は代々続く豪農で経営は安泰だったが、世帯主が弱い体のため、戦後の経済と一緒に眼に見えて家計が苦しくなっ

ていた。

同級生の半分は中学卒で就職した時代に、私は高校に入れただけでも贅沢だったのに、さらに一生の仕事に就いたがために大学への希望を捨て切れずにいた。

その折、看護学校を調べてくれたのは、高校の進学指導の先生で、赤十字社卒の養護教師をモデルにして、「看護師学校ならお金もかからない、三年間勉強すれば一生働ける資格が取れる」と勧めてくれた。その時の判断は、私が看護師に向いているかどうかではなく、国家資格が取れるという魅力に引き摺られていた。

教師は、なるべく経費のからない養成所を国立という枠で調べてくれた。その中で選ばれたのが新宿にある国立東京第一病院付属看護学院である。ここは、GHQが作った、昭和二十三年開校、看護教員を養成する師範学校であった。中学校の数学の先生になりたかった希望を、変更

して看護師の先生になるのも悪くないと自分に言い聞かせ、三千円の仕送りで勉強できる境遇を選んだ。

新宿の戸山ヶ原にある東京第一病院は、昭和十三年に建てられた陸軍病院で、戦火を免れ、頑丈なアーチ形の玄関、城塞のような五階建ての建物が並び、医療の頂点だった。教務主任も師範大卒後、赤十字病院で看護師の資格を取り、率先して戦艦に乗り戦地の救護に当たった、日本のナイチンゲールと称された人であった。

十一期生の三十五人は全寮制で兵隊が使っていた鉄パイプのベッドとカーキ色の毛布、そしてアルミの食器。病院から運ばれる豊富な食事と乳製品、教育環境には恵まれていた。

しかし、私は、誰にも言えず貧しさと闘っていた。二年生後半から、結核で入院している兄に代わって義姉から送ってくる書留は遅れがちで、その上、二千円しか入っていない。全寮制の学院は、アルバイト禁止で、仕送りがストップすれば休学せざるを得ない、という逆境に立っていた。

そんな私を見ていた教務主任は、三年生のみ、経済的に困っている学生を救う手立てとして、夏休み、民間病院にアルバイトできることを教えてくれた。その一つに、御殿場の中央病院があった。私は、田舎に帰らず、学院の紹介状を持って、四十日のアルバイトに就いた。紹介状の中に

は、東京第一病院では症例の少ない婦人科が指定されていた。

教務から「ただし、お金にはなるけど、覚悟していてね。特に、夜は独りで外へ出てはだめよ、進駐軍の街だから」と意味のはっきりしない言葉で送り出された。

新宿から御殿場直通の小田急線で、準急に乘れたので御殿場まで二時間で着いた。

御殿場の駅に降りたとき、富士山に圧倒された。ブルーの空に張り絵のような富士が聳え、雲一つなくすっきり街を見下ろしている。

新宿とは違って明るい洋装の人が待合室にいた。その反面、迷彩服を着たアメリカ人が大股に出入りしていた。ここは進駐軍の駐屯所、自衛隊の演習所のある麓の街だった。

中央病院は中程度の規模の民間病院である。総合病院ではあるが、院長が産婦人科の医師で、経営は安定していると教務から聞いてきたとおり、柔らかいピンク色の三階建て、高原のホテルという感じだ。天井の高い建物は騒音が響かず、欧米式の革の長椅子が並び、リッチな待合室。事務長に面会を求めると、上背のあるにこやかな人が出てきた。

「明日から働いてください。産婦人科の実習は終わっているのですね」

「ハイ」と返事をする、「看護助手の手当を出します」

待遇の良さを自慢した。一日、七百円出すという、八月いっぱい働けば、かなりの収入になると私は胸算した。

夏、一番混む婦人科外来に回された。この外来は、人工妊娠中絶で有名だということを知った。近隣の街だけでなく、都心からも手術希望者が集まってきた。

この病院が流行っているのは院長が中心になって症例の多い医師が手術を担当するから。週二回に限定しているが、その数五十人は超す。その時代、産婦人科医は人工妊娠中絶を避けて通れず、腕を磨くため中央病院に研修に来ていた。どこの診療所でも手術の需要が高まり、日本全体が統計上うなぎ上りになっていた。まして富士の麓の街、御殿場には進駐軍相手の女性が多く集まり、素人でも軍人に犯され社会問題にもなっていた。

ここに来る患者は結婚歴を問わないが、保証人は必要で、手術の承諾書は書かされる。でも大体は身近な男の人の名前を書いてくる。そして人工中絶の理由欄に、「経済的な理由」と書くことが多く、「身体的な理由」と書く人は少ない。

アルバイト学生は看護師の手足になって手術に付き合わされた。看護師の役割は、名前を確かめ、手術着に取り換えた患者を処置台まで誘導。手術が始まれば、看護婦の傍で、器械や衛生材料を段取りに沿って、汚れたものは汚物入れにいう敏捷な動きが要求された。

き抜くにはこれしかないのだと諦め、麻酔が覚めるまで布団の中で過ごし、独りで帰って行く。

「四、五か月経てば、また忘れたように来ますよ」さっきの看護師が投げやりに言った。

私は、この体験で合法的に妊娠中絶ができることは女性の悲劇だと思った。中絶が出来ない国は中絶のできる国がうらやましいと言っただろうが、中絶は決してやさしい解決方法ではない。中絶できなければ、もつと真剣に受胎しない方法を考え、実行するはずだ。そしてそれを相手にも望むはずだ。こんなに簡単に中絶をしていいわけがない。

アルバイト病院で、人工妊娠中絶の悲惨さを知った私は、このまま看護師として臨床についていいものだろうかかと思っただけ。しかし今更看護の道を引き返すことなどできない。それなら産みたくない妊娠はさせない、避妊の方法を教える側の職業に就きたいと、思った。それには保健師の資格が必要だった。

さらにあと一年、公衆衛生看護学院で勉強すれば保健師になれることを知った私は、是が非でも進学したいと強く思った。これもGHQが設けた一県一校の設置義務のある公衆衛生専科の教育機関であった。

私は兄に、公衆衛生看護学校の進学を許して下さいと八方破れの気持ちで手紙を書いた。

「私の結婚費用だと思つて借金して下さい。一生働ける仕

私は、手術の立ち合いをした時のことが忘れられない。子宮から、器械で掻きだされた粘膜や血液は膿盆の中にとまる。その中から白い透明な袋を探す、壊れていなければ小さな胎児が入っている。しかし、妊娠二か月過ぎてなければきちんとした形になっていない。見つければこれをガラスの容器に入れる。血液や粘膜は洗い流してしまうが、ガラスの容器に入れた胎児らしい粘膜は保存する。これらは特定の業者が持ち出し焼くという。

手術に立ち会った日には、夕方、食事が喉に通らなかつた。私も、臭いを嗅がないように、手にも触れないように処置するが、見てしまったガラス瓶は眼に焼きついて離れない。

「妊娠しない方法はないんでしょうか」私は看護師に聞いた。

「あることはあるんですが、役場の保健師が無料でコンドームも配っていますよ。でも駄目ね。そんなのは役に立たない、中絶した後の方が妊娠しやすいのだから。生理を一回見るだけで、また妊娠する。また同じ繰り返し、だって産めない子を宿すんだから。そのうち子宮内膜炎を起こし、正常な出産が出来なくなる」

中絶が終わった女性は、これでホッとするのか、また働けると思うのかその心境は外から見たのでは分からない。たとえ、戦争のせいだということを知っても、戦後を生

事を見つけましたので」と。

人生というのは「念ずれば花ひらく」という諺があるが、ある日突然、予想だにしていなかった「あしながおじさん、父の従兄弟」が出現した。萩窪で歯科医院を開業している従兄弟は、母の生家の娘が、同じ医療で身を立てたいと望むなら学費、月二万円は立て替えておくからと言ってくれた。すべて入院している兄のはからい、根回しであった。

私は、翌年、「神奈川県公衆衛生看護学院」の入学試験に合格した。

私は、定年まで働くという初心を貫くため、保健所の保健師になった。

戦中の多子多産から一変した時代の追風を受け、家族計画、受胎調節、そして基本となる避妊指導に焦点を当てて働くことができた。



小野友貴枝

おの ゆきえ

1939年生まれ  
神奈川県立公衆衛生看護学院卒  
元秦野市社会協議会会長  
障害者ボランティア  
秦野市文学同人「風恋洞」代表  
主著「那珂川慕情」(叢文社)「愛  
の輪郭」(日本文学館)「65歳  
ビューポイント」(日本文学館)  
日本ペンクラブ会員

小説の書き方を体験を踏まえて丁寧に解説する小説指導書

# 小説の書き方

作家を志す人のために

五十嵐 勉

アジア文化社

送料共 1000 円 (税込) 御注文はアジア文化社まで

## 受賞の言葉

小野友貴枝

文芸思潮への応募歴は結構長く、銀華文学賞もエッセイ賞もそれなりに入選しているが、いつも奨励賞止まりだ。だから今回の優秀賞はうれしい。

入賞した人々から、五十嵐編集長から受賞のお電話を貰ったという記事を読むたび、うらやましく思っていた。そしてこのたび待ちに待った編集長の優秀賞の連絡をいただいた。「ありがとうございます」と受話器に頭を下げた。今回の作品は、私の人生を左右した経験で、書き溜めていた作品でもある。内容は戦後、富士の麓の街で、人工妊娠中絶がいと簡単に行われていたという女性の悲劇。その場にいたものでなければ書き表せないものである。

また、最近、一四歳からの日記が見つかり、日記歴もロングで自分でもびっくりしている。日記は人に見せるものではないと信じて疑わない私が、日記の愛しさに負けて、なんとか編集したいと心変わりしている。この経験も次のエッセイのテーマになりそうで、いつまでも書くことには困らない、創作は年齢に関係なくエンドレスだ。



人は「あたたかさ」で  
つながってゆく

日本文学賞 © 定価 (本体1,300円+税)

1300 円 (税込/送料共)

文芸思潮文庫 540 円 (税込/送料共)

御注文はアジア文化社まで

## 鶏小屋

Essay

## 八束一臣

子供の頃、屋敷の中の鶏小屋では五十羽ほどの鶏を飼っていた。飼うというより、子供の私には一緒に暮らしている、という感じだった。

五歳頃であったか。私には手伝う仕事があった。鶏小屋に入って卵を集めることである。この仕事は小さな子供には難しかったが、親たちはなぜだか私一人に任せた。

鶏小屋に入る時は胸が高鳴った。入口の鍵を外して中に入ると、雄鶏たちの目が光った。私は彼らから目を逸らせた。餌をくれる大人とは違う人間が、竹かごを持って入ってきた。彼らから見ると、子供であっても卵を奪う侵入者に違いなかった。

鶏小屋は周囲を板張りにしてあって、薄暗かった。薄暗い小屋の中で卵だけが光っていた。産んだばかりの温かい卵を手にする、鶏の命に触っているようだった。

金網で仕切られた砂場は、二十羽くらいの鶏がゆつたりと砂浴びのできる広さであった。南向きで陽のよく当たる砂場だった。薄暗い鶏小屋を出て、鶏たちは明るい陽を浴びて羽に砂をかけていた。砂はきれいに舞った。浜辺から採ってきた砂だったので、きらきらと光っていた。

鶏たちは砂遊びが好きだった。大きくなって知ったことだが、遊んでいるわけではなくて、羽の間にわく虫や汚れを落とすためであったらしい。

金網越しに鶏の砂遊びを見るのは楽しみだった。姉と二人金網に顔をくっつけて、鶏たちが砂をかけ合うのを、いつまでも飽きずに眺めていたことを思い出す。

金網小屋には一本の葡萄の木が植わっていて、夏になると枝を延ばして砂場に葉っぱの影を作った。どんなに暑い日でも、鶏たちは葡萄の緑の影の下で、涼しそうに砂遊びをしていた。

葡萄が熟れてくると、姉と二人で梯子を掛けて、熟れた葡萄をもいで食べた。紫色の甘酸っぱい葡萄だった。ペッと捨てた種を、鶏たちは競って取り合った。

母屋の土間の一面に倉庫がつくられていた。集めた卵は一時そこに保管された。月に何度か卵買いの業者がきて、倉庫から出した卵を秤に掛けて買っていた。当時の農家にとって卵はとても貴重な現金収入であった。

卵を産もうとしている鶏は、近くに寄ると威嚇するので、怖くて近づけなかった。私の後を親しそうに付いてくる鶏たちもいた。

鶏小屋は広く、周りには柵が作ってあって薬が敷かれていた。柵で産んだ卵はきれいで集めやすかった。地面にも薬が敷いてあった。薬には鶏の糞がついてベトベトしている。糞で汚れた卵を拾い、シャツで拭いてかごに入れた。汚いという意識はなかった。鶏の糞は貴重な肥料であった。大人が大事そうに扱っているのを、いつも見ていた。

卵で一杯になったかごをもって、鶏小屋から出ると、汗びっしょりになっていた。大きな仕事をなしとげたような充実感があった。

小屋の隣には周囲を金網で囲った砂場が作られていた。

「卵、割れちようよ」

ひび割れた卵を見つけた姉がそう言う、心が躍った。

「たまごごはんがたべれえど」

ひび割れた卵は、姉と私の卵かけご飯になった。子供だけの贅沢だった。

一個の卵をゆつくりとかき混ぜて、醤油をちよつと垂らして、母は姉と私のご飯の上にかけてくれた。麦がたっぷり入った麦ご飯だったが、生卵を混ぜると、これ以上の美味しいご飯はなかった。

子供たちがふらふらと呼ぶ卵料理があった。これもひび割れた卵があったときだけである。卵に砂糖と少しの塩で味をつけ火にかける。固まらないように母は箸でかきまぜている。母のかき混ぜる箸先から目が離せなかった。一混ぜするたびに半熟の卵が匂い立った。半熟のふらふらも子供たちだけのご馳走であった。

風邪を引いて熱を出して寝込んだときには、赤梨と砂糖を煮詰めた汁と、生卵を吞まされた。産み立ての大きくて温かい卵だった。卵の白身をとって黄身だけを、ごくんと呑んだ。大きな卵には黄身が二つ入っているのもあった。黄身を吞み込むと、なぜだかすくにも元気になるような気がした。

鶏たちは何年か経つと卵を産まなくなる。体が細って白い毛が抜け始めると、子供の目にも年老いた鶏に見えた。「しめちゃあけんな」

祖父は子供たちを庭に呼んだ。鶏を絞めるのを見せるためである。

祖父は鶏小屋からは離れた庭の隅に切り株を置いた。手には鉋をにぎっている。姉と私は足を縛られた一羽の鶏を見ていた。何が始まるのか、私は知らなかった。姉の顔は曇った。

祖父は鶏の首を押さえて鉋をふるった。頭部がころんと落ちた。姉が目伏せた。私には何がおこったのか、わからなかったが、目を据えてじつと見ていた。地面に落ちた鶏の目は開いたままだった。頭部を切断するのは血抜きをするためである。

と、突然、頭部を失った鶏が縄を振り払って走り出した。四、五メートルくらい走ったところで、どうと倒れた。

私が目にしたのは、ただそれだけの情景だったが、残酷だとは思わなかった。むしろ駆けだした鶏の姿に驚き、振り絞るような生命の力を感じた。

祖父は湯を沸かした大鍋に鶏を入れて毛をむしった。そして藁束に火をつけて、鶏を炎の中に入れた。頭部もぼんと投げ入れた。炎が上がり鶏の焼ける匂いが鼻をついた。

ル箱の中を覗き込んだ。箱の中には大きな裸電球が入れてあって、電球の周りに積み重なるように小さな生物がうごめいていた。

黄色いひよこたちであった。裸電球はひよこを温めるための暖房である。電球に照らされて、ひよこたちは小さな体を寄せ合っていた。暗い土間のそこだけが明るかった。指を近づけて触ると、ひよこたちは体を寄せてきた。小さな命の温もりが伝わってきた。雪に包まれた家の中の、その一隅だけがぼうつと光っていた。

春になると姉と二人で、小さな背負子と鎌をもって草刈りにでかけた。鶏は柔らかい草を好んだ。ひよこ草やオオバコ、クローバーなど、春の柔らかい草を選んで刈った。刈ってきた草を刻んで糠と混ぜて餌箱に投げ入れると、春の匂いに誘われて鶏たちが集まってきた。

子供だけの餌作りもあった。春の海辺から拾ってきた貝殻を、石で割って粉々にして与えた。貝殻は卵の殻を固くすると教わっていた。春の鶏小屋は、柔らかい草の匂いと、細かく砕いた貝殻の海の匂いで満ちた。

こうして、鶏小屋と子供たちの四季が、また始まっているのだった。

藁束が燃え尽きると、煙で黒ずんだものが現れた。見たことのない鳥の形だった。

祖父は包丁をとって鶏の腹を割いた。奥の方に大小のビー玉のような黄色い玉が数珠のように繋がって見える。卵になる前の黄身であった。

「鶏は捨てる所がないだけ」

祖父がぼつりと言って、肉や内臓をすばやく切り分けて盥の中に仕分けていった。慣れた手つきだった。

その夜、家族の食卓はにぎわった。鶏肉の煮込みみだった。めつたに食べられない料理なので、大人たちは舌鼓を打った。

姉と私の皿にも肉が盛りされている。姉は柔らかいところを時々口に入れた。私は夕方にみた光景を思い出したが、食べないのは鶏に悪いような気がしてきた。不思議な気持ちだった。

小さなビー玉のような黄身を口に入れた。病気の時に呑み込んだ生卵の黄身と違って、味付けがしてあって甘く美味しかった。私はビー玉のような黄身を次々と口に入れていった。

山陰の雪は深い。子供の体が埋まるくらい降った。朝起きると庭は真っ白だった。

綿入れを着て土間に降りて、厚い布で被われたダンボー



八束一臣

やつか いっしん

1947 鳥取県生まれ  
 広島大学大学院（修士）修了。退職後、創作に専念。  
 2013「文芸思潮」エッセイ賞（奨励賞）  
 14「文芸思潮」エッセイ賞（優秀賞）

## 受賞の言葉

八束一臣

優秀賞に選んでいただきまして、ありがとうございます。私は今、「昭和の子供」という連作に取り組んでいます。この作品「鶏小屋」もその一編です。エッセイの題材としては、子供の頃のもも小さな世界です。その小さな世界のどこかに、エッセイとしての普遍性を見出そうと思っています。「昭和の子供」は今後も書き継いでいきたいと思っています。



## 骨を播く

## 山崎人功

六年前に亡くなった母の日記帳は十冊あった。市販の厚い日記帳や大学ノートや手帳には二十数年間の暮らしの様子子が、さらさら流れる水のように書いてあった。日記帳の存在は早くから知っていたが読む気にならなかったのに、急に読んでみる気になったのは、私の兄弟姉妹六人が正月に集まった折に、お互いに老齢になったから最後の親孝行として、なき父母の一代記を発行して子孫に語り伝えようと決めたからだだった。父母に関する写真や資料を集めたり、各人が両親に寄せる思いや喜怒哀楽の想い出等も書いて載せることになったが、いざ書き始めてみると記憶にあいまいなところがあったり、亡き母の人間像も霞んでいるような気がして日記を読むことになったのである。

筆と箸しか持ったことがないと言われた大地主の娘が、汗まみれで鋤をふるって大地を耕すようになったのは、昭和という激動の時代を生きてきたからだだった。結婚すると

夫の任地である東京へ移り住むようになり、戦時下でも恵まれた生活を続けていたのだが、東京大空襲ですべてを失って命からがら故郷の家に辿り着いてからは、配給生活では飢えるばかりなので、貸してあった田畑の一部を返してもらって母は農婦にならねばならなかった。

農地解放で父祖伝来の田畑が他人のものになってしまいうと、山地を開墾して畑を増やし一家の食料は自給自足できるようにになったが、やがて父の就職先も見つかり子供達も自立して親のもとを離れていくようになって、母は勤勉な農婦でありつづけた。家を継いだ私が勤め人になって稼ぎだしても農業をやめようとしないので訳を聞くと、種を播いてから収穫するまでが楽しくて幸せなんだよと笑っていた。時代は移り変って気楽に暮らせるようになったのに、なんとも不思議なことだと私は思ったものである。

胃痛で入院するまで母は現役の農婦だったし、日記は入

院中も欠かさず記されていて、読んでみると、母は本当の農婦だったということが分かってきた。折にふれて農とは何かを自らに問い、人の生き方や人生の在り方に思いをいたし、金と物を求めてやまない風潮を憂い、文明の行方を嘆きつつ、ひたすら大地を耕す農婦であることの誇りと幸せがさりげなく綴られていた。

私は脱帽して母を仰ぎ見るばかりだったが、亡くなる五日前の日記を読んで息をのみこんだ。

「農婦の骨が壺に閉じこめられて墓に納められ、永遠に太陽を拝めず土へも還れないとすれば耐えられないことだ。息子には未だ話してないが、私の骨は粉にして先祖代々耕してきた屋敷畑と花園へまいてもらいたい」と書いてあった。明日にも息子が来たら話すつもりだっただろうが、容体が急変し鎮痛緩和剤投与によって話す機会は失われてしまったのだった。

これは遺言だと私は思った。一般に散骨と呼んでいるが、農婦の骨粉を畑にまくのだから、ぱーっと撒き散らすのではなく、種を播くように土と語り合いながら丁寧に播かねばなるまい。然しどうやって骨粉にすればいいのだろうかと迷った挙句に、母が大事に使っていた昔のアルミ鍋が物置小屋にあるのを思い出した。そして今も時折使う摺粉木は亡き父が裏山からサンショウの木を伐ってきて手作りしたものだだった。

唐櫃からうこから母の骨壺を取り出し蓋を開けてみると、火葬場でぎしぎしと詰め込んだ骨は数粒沈んでいたが、六年ぶりの眩しい陽光に歓声をあげているように思えた。

「長い間、閉じこめといて、ごめんよ」

私は語りながら、持参した母愛用の裁縫箱へ壺の骨を半分程移すことにしたが、上に乗っていた頭頂骨を裏返ししてみても驚いた。ひび割れた白い面には紫色と紅色と桃色のかみま微が斑模様(かみま)に広がっていて息をのむ程美しく、その神秘的な彩りは骨が化粧して今日という日を待っていたようにも見えた。

「やつぱ、おてんとさまはいいねえ。ありがたいねえ。土の香がする風も、懐かしいよ。うれしいねえ」

大らかな農婦の声が聞えてくるようだった。

鍋へ骨を入れて摺粉木で搗いていると、子供の頃のことを思い出した。たいた餅飯を摺粉木で潰してぼた餅を作るのだが、ひもじい子供達は順番に搗きながら母の目を盗んでちよっぴりずつ食べていた。

忽ち粉になる骨と容易に砕けない骨があったが、暫らく搗いているとさまざま色が混じりあった骨粉になったので裁縫箱へ移して外へ出た。ざらざらした夏の太陽と草いきは、汗びっしょりで働いた農婦の骨を畑に播く儀式にはふさわしく思えた。

私は退職後に母から野菜作りを教わったが、種播きから



山崎人功

やまざき ひとのり

- 1929年 東京生まれ
- 1945年 日本医大中退
- 87 農民文学賞受賞
- 2011 文芸思潮エッセイ賞奨励賞
- 12 文芸思潮エッセイ賞奨励賞
- 13 文芸思潮エッセイ賞奨励賞

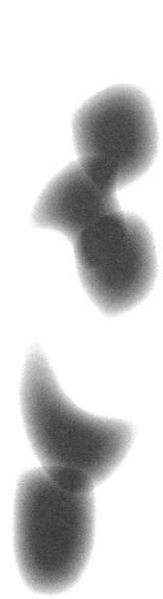


受賞の言葉

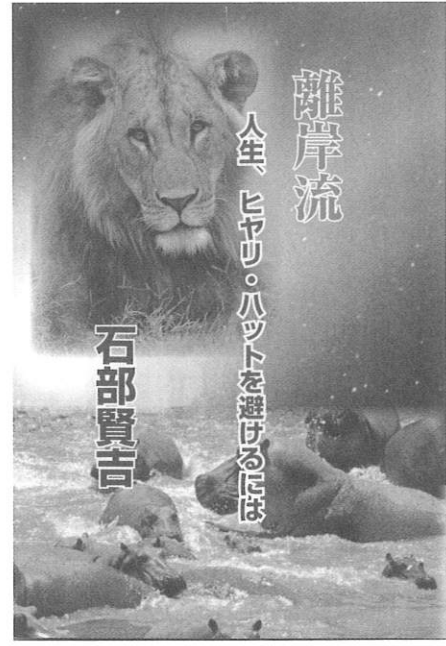
山崎人功

年はとりたくないけれど、年をとれば「見えてくるもの」や「分かってくるもの」が増えるので面白い。  
戸籍年齢を無視して創作年齢は六十六歳なので、今回の受賞を励みとして、これからも読者を感動させるような作品を書き続けていきたいと思っています。

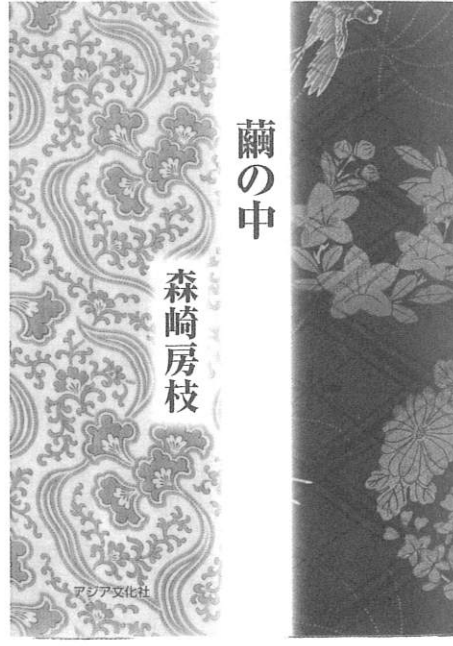
収穫までの知識や技術は一通り覚えても、生来の怠け者で農夫にはなりきれなかった。母が亡くなって漸く本氣になつてやりだしたが、今年は屋敷畑の野菜類は順調に育つていた。  
「ほーら、おふくろが土作りしてくれたおかげで、何でも豊作だよ。ここはおふくろの畑だ。そーら、土に還れるよー」  
親指と人差指と中指の三本で骨粉をつまんで種播くように茄子の畝にばらばらと播いてみた。種は芽が出るが骨粉は根に吸われて実の中に入っていくだろう。その茄子を食べれば我が身の内に亡き母が蘇るような氣がしてきた。茄子に続いて胡瓜の畝やトマトの根元へもばらばらと播いてみた。  
「まじめに百姓やるんだよ」  
母の諭す声が聞えてくるようだった。  
晩年の母は混植畑が理想の畑だよと言って、野菜畑の一隅を花畑やハーブ園にしたり、周りに梅や柿の木を植えてたりしていたので私も混植を守ってきた。その花畑は蝦夷菊と京鹿子の花盛りだった。  
私は広い苗床に種を播くように骨粉を軽く握ると右へ左へ大きく腕を振って播いた。  
「ほーれ、おふくろが大好きだった蝦夷菊だ。美しい花になーれ」



紫と黄と紅の花と緑の葉に白い模様が加わって光っていた。根からも吸われて蓄となり花と咲けば、母はきつと満足の笑みを浮かべることだろう。  
梅と柿の木の根元にも播くことにした。母が作った干柿の美味は忘れられない。むしろ今年から干柿を作ってみようかと考えた。梅は来年春に花が咲くから、母は花びらと共に風に乗って畑を舞いながら土に還っていくだろう。  
最後に残った一握りの骨粉は、母が最初に産んで育てた私の上に播くことにしようとした。帽子を左手に持ち右手を高く上げ背をのびし息を深く吸って目を瞑ってから右手の指を動かすと、さらさらと骨粉が軽く優しく降ってきた。母が菩薩の笑みを浮かべて私の両肩に乗っているような氣がした。仰向いて口を開けると舌にさらさらと張り付いたが、やがて私の中へ母は静かに入ってしまった。  
至福の時の彼方から懐かしい母の声と顔と物語りが次から次へと寄せてきた。



元一流商社マンの地球規模の体験記  
1300円 (税込/送料共)  
御注文はアジア文化社まで



まほろば賞特別賞・銀華文学賞優秀賞受賞作品  
森崎房枝小説作品集  
1500円 (税込/送料共) 御注文はアジア文化社まで